

目 次

特別記事

- 映像で見つめた「馬と人」—ドキュメンタリー映画2作品 監督が語る—
…………… 笹谷遼平 × 平林健一（聞き手：関 正喜）…………… 1

馬事往来

- 作業療法士から見たホースセラピー
馬との活動 …………… 石井 孝弘 …………… 12
北の大地の草ばん馬 …………… 小久保友香（写真：小久保巖義）…………… 19

Journal of Equine Science Vol. 31 No. 4, December 2020 和文要約…………… 26

お知らせ …………… 29

協賛団体名・賛助会員名簿 …………… 30

編集後記

Hippophile No. 83

- 編集委員 -

編集担当常任理事・編集委員長	楠瀬 良（日本装蹄協会）	
編 集 委 員	相川 貴志（地方競馬全国協会）	関 正喜（ジャーナリスト）
	荒川由紀子（農林水産省）	永井富美子（エディター）
	有吉 正徳（朝日新聞社）	沼田 恭子（NPO 法人引退馬協会）
	北野あづさ（日本馬術連盟）	古林 英一（北海学園大学）
	木村李花子（東京農業大学）	三浦 暁子（エッセイスト）
	近藤 誠司（北海道大学）	守谷 久（ジャーナリスト）
	近藤 高志（JRA 競走馬総合研究所）	山口 洋史（全国乗馬倶楽部振興協会）
	末崎 真澄（馬の博物館）	山下 大輔（日本馬事協会）
	杉本 篤信（地方競馬全国協会）	

表紙絵：騎手（The Jockey）：アンリ・ド・トゥールーズ＝ロートレック（1864-1901）1899年 49.8×34.1 センチ多色刷り
リトグラフ 馬の博物館蔵

「騎手」は、晩年に近い療養中に一連のサーカスシリーズとともに表した作品である。ロートレックは、少年の頃に父親とともに乗馬をし、競馬場にもしばしば通った経験があり、晩年に再びその情景を思い巡らしている。後ろ姿の騎手は、あるいは馬と競馬を愛した父と自分の姿を映し出しているのかもしれない。

日本ウマ科学会

Japanese Society of Equine Science

初代会長 本好茂一先生，逝く



(安田和雄氏提供)

2020年9月初旬、当学会の初代会長であり、会長退任後は名誉会長として奉戴されていた本好茂一先生が永眠された。享年91歳である。ここに会員を代表して、心からの弔意を捧げるとともに、先生のご冥福を心から祈りたい。

私たちが本好先生の訃報を知ったのは、12月初め。学会事務局に届いたご遺族からの喪中通知状であった。迂闊にも、亡くなられてから3か月も経過していた。コロナ禍による未曾有の自粛体制の最中、ご遺族の配慮により、家族葬としてしめやかに葬儀が行われたと聞いている。直接、御霊前に駆けつけてお見送りしたかったが、昨今の世情の混乱を考えると、残念だが、やむを得ないところである。

当学会が発足したのは、1990年3月。設立総会において、当時、日本獣医畜産大学（現：日本獣医生命科学大学）の内科学の教授であった本好先生が、初代会長に就任された。それ以降、2001年までの11年間、当学会の会長を務められた。その人脈の豊富さと見識の広さを十分に活用して、創生期にあった未熟な学会組織を引率し、現在の安定的な組織基盤の整備に尽くされた数々のご功績は、筆舌に尽くせないほど多大であった。なかでも1998年、宇都宮にて第5回国際馬運動生理会議の開催を受諾し、世界各地から約300名の参加者を得て、成功裏に閉幕させたこと、さらには英文の機関誌『Journal of Equine Science』だけでなく、和文誌の『Hippophile』を新たに立ち上げて、会員相互の連携を強化したことなど、多くの足跡を残してこられた。

本好先生の魅力の1つは、その柔和なお人柄とユーモアに富んだ話術であった。講義や特別講演での聴衆を飽きさせない楽しく流ちょうな語り口は、実に見事でもあった。雑談ともなればなおさら、その口調はなめらかで、思い出話や業界の裏話など、時間を忘れて語り尽くしていたものである。その後、先生が落語をこよなく愛していたことを知り、面白おかしく語る先生の話術のルーツを納得したものである。そんな洒脱で気取らない先生の周りには、いつも老若男女を問わず、多くの教え子や知人が集まっていた。その輪の中心で満面の笑みを浮かべながら、彼らとの談話に熱中していた先生の姿が、今もありありと思い浮かぶ。

本好先生は、獣医学の中心がまだ馬に置かれていた時代を知る数少ない教育者であった。今また再び馬専門の臨床や学識を身につけた獣医系大学の若手教育者や研究者が台頭しつつある実情を、きっと先生は心強く感じながら旅立たれたに違いない。

「お疲れさまでした。どうか安らかにお眠りください」合掌。

日本ウマ科学会
第五代会長 青木 修

文部科学省「職業実践力育成プログラム」 山口大学「馬予防医学実践力育成プログラム」 のご案内

山口大学では、馬の予防医学に必要な知識および技術について、Hands-onプログラムを通して社会人の学び直しのためのリカレント教育（大学卒業後の人材育成）を行っています。

これらのカリキュラムや実績を下に、「仕事」や「家事・育児」が忙しく自己啓発の余裕のなかった社会人、「適切な教育訓練機関が見つからない」、「教育コースの情報が得られにくい」あるいは「どのようにして情報を入手するかわからない」などの事情を有する社会人に対して「馬予防医学」の実践的思考、知識、技術等を学ぶ機会を提供するため、履修証明制度¹⁾の要件を満たした「馬予防医学実践力育成プログラム」を新たに開設しました。

「履修証明制度」とは：文部科学省が推奨する、大学が学生の教育や研究に加えて、より積極的な社会貢献として、社会人向けに体系的な学習プログラムを開設し、その修了者に対して、法に基づく履修証明書を交付できる制度です。

- ・対象：地方で活躍される馬飼養管理に関わる社会人（それ以外の方も受講可能。経験者・未経験者不問）
- ・定員：10名
- ・受講料：60,000円（履修時間 60時間）
- ・応募期間：2021年1月14日～2021年2月28日まで（定員になり次第締め切ります。）
- ・プログラムの期間：2021年4月1日～2021年10月31日（7ヶ月）

プログラムの特徴

- * 全国どこからでも受講可能です。集中的に山口大学でのHands-on臨床実習・グループディスカッションの講義時間はありますが、事前自己学習・レポート作成についてはe-ラーニングなどITを活用した授業形態ですので、夜間など、自分の都合のよい時間帯に講義を受けることができます。
- * 1年間で60時間の授業の受講が必要です。なお、60時間のプログラムを修了すると、山口大学から学校教育法に基づく履修証明書が発行されます。取得した履修証明書は履歴書や名刺に記載できます。
- * 正式名称：山口大学履修証明プログラム「馬予防医学実践力育成プログラム」修了認定
- * このプログラムは、1月に募集開始します。4～7月に事前自己学習として馬予防医学に必要な知識についてe-ラーニングを用いて50時間学修します。授業は元BTCの兼子廣樹先生による講義を受講することができます。8月には集中実習として山口大学で下記のHands-on臨床実習を8時間ならびにグループディスカッションを2時間実施します。

Hands-on臨床実習（集中実習）の概要

- 1：目 標 馬の予防医学に必要な知識および技術をHands-onプログラムを通して学び直しましょう。
- 2：期 間 2021年8月30日（月）
- 3：場 所 山口大学動物医療センター2Fセミナー室、産業動物診療室等
- 4：持参品 作業着・長靴・帽子・秒針つき時計。
- 5：備 考 実習の生体材料の準備の都合上、モデルを用いた実習となることがあります。
- 6：講 師 山口大学：佐々木直樹（コーディネーター）
田浦保穂・西康暢（大動物臨床）

※ シラバスの詳細・募集要項・履修証明プログラム履修許可願のダウンロード等については山口大学共同獣医学部HP（<http://www.vet.yamaguchi-u.ac.jp/umaprogram/>）をご覧ください。

- ・ お問い合わせ先（Email: nsasaki@yamaguchi-u.ac.jp 佐々木直樹）
- ・ 申し込み先：山口大学共同獣医学部学務係 〒753-8515 山口県山口市吉田1677-1 TEL：083-933-5808

目 次

特別記事

映像で見つめた「馬と人」—ドキュメンタリー映画2作品 監督が語る—
…………… 笹谷遼平 × 平林健一（聞き手：関 正喜）…………… 1

馬事往来

作業療法士から見たホースセラピー 馬との活動…………… 石井 孝弘……………12

北の大地の草ばん馬…………… 小久保友香（写真：小久保巖義）……………19

書籍紹介……………25

Journal of Equine Science Vol. 31 No. 4, December 2020 和文要約……………26

お知らせ……………29

協賛団体名・賛助会員名簿……………30

編集後記

Hippophile No. 83

- 編集委員 -

編集担当常任理事・編集委員長	楠瀬 良（日本装蹄協会）	
編 集 委 員	相川 貴志（地方競馬全国協会）	関 正喜（ジャーナリスト）
	荒川由紀子（農林水産省）	永井富美子（エディター）
	有吉 正徳（朝日新聞社）	沼田 恭子（NPO 法人引退馬協会）
	北野あづさ（日本馬術連盟）	古林 英一（北海学園大学）
	木村李花子（東京農業大学）	三浦 暁子（エッセイスト）
	近藤 誠司（北海道大学）	守谷 久（ジャーナリスト）
	近藤 高志（JRA 競走馬総合研究所）	山口 洋史（全国乗馬倶楽部振興協会）
	末崎 真澄（馬の博物館）	山下 大輔（日本馬事協会）
	杉本 篤信（地方競馬全国協会）	

表紙絵：騎手（The Jockey）：アンリ・ド・トゥールーズ＝ロートレック（1864-1901）1899年 49.8×34.1 センチ多色刷り

リトグラフ 馬の博物館蔵

「騎手」は、晩年に近い療養中に一連のサーカスシリーズとともに表した作品である。ロートレックは、少年の頃に父親とともに乗馬をし、競馬場にもしばしば通った経験があり、晩年に再びその情景を思い巡らしている。後ろ姿の騎手は、あるいは馬と競馬を愛した父と自分の姿を映し出しているのかもしれない。

日本ウマ科学会

Japanese Society of Equine Science

特別記事

映像で見つめた「馬と人」

—ドキュメンタリー映画2作品 監督が語る—

笹谷遼平 × 平林健一（聞き手：関 正喜）

昨年（2019年）冬、『馬ありて』（笹谷遼平監督）と『今日もどこかで馬は生まれる』（平林健一監督）というドキュメンタリー映画2作品が相次いで劇場公開された。前者は山から伐採木を下ろす馬搬作業はじめ日本で長らく営まれてきた馬と人との暮らしを見つめ、後者は競馬に携わる現場のさまざまな声を通して競走馬の「引退後の生」について問題提起を試みている。カメラを向けた対象も映画としての手法も対照的ながら、ともに「馬と人」「馬の生と死」を掘り下げた両監督にお話を聞き、語り合っていた。この企画は本年春に予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大のために延期し、あらためて9月16日に実現することができた。聞き手・司会は本誌編集委員の関正喜が担当した。



笹谷遼平（ささに りょうへい）

1986年京都府生まれ。同志社大学文学部哲学科を卒業して映像制作に取り組み、これまでの作品に『昭和聖地巡礼』（2008）『蠟塊独歩』（2009）『すいっちゃん』（2011）『カミカゼという名の塹壕』（My Rode Reel 2017 Best Japanese 賞受賞＝オーストラリア）など。初め

ての劇映画監督作品である『山歌（さんか）』（2019）が劇場公開待機中。

『馬ありて』2019年／モノクロ／88分

製作：六字映画機構、グループ現代 配給：グループ現代、監督・撮影・編集：笹谷遼平、音楽：茂野雅道

マイナス25℃。全てが凍る北海道の大地に鼓動を打ち鳴らし、しっかりと根を下ろした「ばんえい競馬」の力強い姿は、多くの人を魅了している。同時に、そこでは「馬喰」を介し、馬が経済動物として取引される。同じ地域に存在する対照的な馬たち。馬と人間の営みの本質とは何か？ その手掛かりは、日本の原風景とも言うべき岩手県遠野にあった。「馬搬」という職業、馬にまつわる「オシラサマ」の伝説が今も生きていた。ここでは経験や信仰を今に伝え、豊年を祈願する馬と人間の営みが連綿と続いていた（作品パンフレットより）。上映情報などは公式サイト：

<https://horse-beings.com/>

平林健一（ひらばやし けんいち）

1987年、青森県生まれ。広告代理店や芸能プロダクションでの勤務を経て多摩美術大学に進学。卒業後は映像ディレクターとしてテレビ番組やオンデマンドメディアを中心にドキュメンタリー作品を多数制作。現在は映像ディレクターとして制作を請け負う傍

ら、映像制作分野の業務最適化や人事教育のコンサルティングにも携わっている。



『今日もどこかで馬は生まれる』2019年／カラー／95分

制作：Creem Pan、企画・監督・編集：平林健一、制作総指揮・撮影・編集：平本淳也

多くの馬たちが、天寿を全うする前にその生涯を終えている。競馬産業に関わる人々の中で長らく暗黙の了解とされていたこの引退馬の課題について、当事者たちは何を思い、どう考えているのか。その答えを探して私たちは、競馬をこよなく愛するファン、馬主、調教師、生産者、馬を生かしたビジネスを展開する経営者など、さまざまな立場で馬と関わる人々を訪ねた。そこには、馬を尊敬し、馬と真摯に向き合う人々の姿があった。馬を愛する人たちの声が大きき力に変わり、今、確かに、新しい風が吹き始めている（作品パンフレットより）。上映情報などは公式サイト：

<https://creempan.jp/uma-umareru/info/screening/20200118.html>

——まずはお二人の馬との出会い、映画を撮られた動機などをお話してください。

平林：父が大の競馬好きで、部屋には競馬週刊誌や種牡馬事典があり、競馬新聞も5年分ぐらいストックしていました。小学生のころからそれらを引っ張り出して眺めているうちに父よりも血統などに詳しくなって、父も僕に予想を聞くように。「芝の1800はどうか？」「男馬より女馬の方が走るよ」とか（笑）。

中学生になると、競馬シミュレーションゲームのダービースタリオンが流行ってきます。ダビスタでは「この馬は引退して乗馬になりました」というのが必ず出てきます。単純に「そういうものなんだな」と思っていました。その後インターネットで好きだった競走馬を調べていくことができるようになると、乗馬になったはずなのにいないとか、あそこの乗馬クラブは馬をどこかに売っちゃうとか。信憑性に問題がありますが、ここまで書かれるのは、もしかするとほんともかもしれない。競馬は楽しいのですが、何かもやもやがありました。

大学を卒業して映像のディレクターになり、広告系の映像やテレビ番組を作っていたのですが、その会社で自分たちが作りたい映像を制作するサークルを作ったのです。サークル名はCreem Pan（クリームパン）といい、そこでみんながアイデアを出し合いました。そこで僕は競走馬の「その後」を映像にする企画を立て、それが『今日もどこかで馬は生まれる』になりました。ですからもともとのきっかけはダビスタだったわけです。

——作品には競馬に携わるさまざまな人が登場します。どのような経緯で取材が繋がっていったのですか？

平林：結構大変でした。最初はJRAに取材をお願いしました。とりあえずレースを撮らせて欲しいと。ですがことごとくダメでした。報道でもないですし、もともと繋がりがあったわけでもないです。

出演者のうちで最初にコンタクトを取ったのは、岩手県八幡平で馬と共生する農業を営んでいるジオファームの船橋慶延さんと、認定NPO法人引退馬協会の沼田恭子さんです。ネットニュースで船橋さんのことを知り、「この映像があればダークな課題をポジティブなものに描けるかもしれない」と思いました。

JRAとの間を繋いでくれたのも沼田さんです。「何か困ったことはありませんか？」と聞かれたので、どな



『今日もどこかで馬は生まれる』より

たかJRAの人を紹介してもらえないかうかがったところ、調教師の鈴木伸尋先生を紹介してくれました。それで美浦トレセンに鈴木先生をお訪ねし、企画書をお見せしたところ快諾してくださり、あとはJRAとも順調な関係が持てるようになりました。映画ができた後に聞いた話なのですが、関係者の中では撮影に反対する人も多かったそうなのです。それを鈴木先生が全部自分が責任を持つということで、許可をいただいたのだと知りました。

——なるほどそうでしたか。笹谷さんの方はいかがでしょう。

笹谷：私の場合は、実は最初は馬とか関係なかったんです。2011年の東日本大震災をはじめいろいろな事件があって、映像で自然とかに向かい合いたいという思いを持ち始め、瞑想と迷走の数年間を過ごしていました。そうした中で十代のころから好きだった林芙美子の詩「蒼馬を見たり」を思い出し、過去の生活には身近に馬がいたんだろうなと思いを馳せました。昔の映画を見ても馬が走っていたりして、私の中のどこかに馬に対する憧れみたいなものがありました。それと美しさの象徴としての馬をモチーフとして、映画に取り組みないかなと思ったわけです。そうして最初に訪れたのが、帯広のばんえい競馬でした。

ばんえいはネットで見たのが最初です。どうして見たのかは思い出せないのですが、とにかくこんなに大きな馬がいたのかと。その大きな馬が一步一步進んでいく姿を見て、映画のモチーフになりそうだと感じました。そこで帯広に出かけたんです。作品の中にマイナス25度の夜明けのシーンがあるのですが、あれは到着して一日目に撮れました。まつ毛まで凍るような気



『馬ありて』より

候で、あのシーンが撮れて、これなら映画にできると思ったんです。

平林：そういう経験、僕にもありますね。

笹谷：そうです。これが何かの軸になると思えました。2013年1月のことでした。それから完成まで5年以上かかりましたが。ですから最初はばんえい競馬のドキュメンタリーを作ることから始まったのです。

——ですが最終的な作品はばん馬生産者の戸田富治さん、岩手県遠野で長年馬搬に携わる見方芳勝さん、そして馬喰（家畜商）の多村稔さんの三者三様の日常と馬との暮らしを見つめるという構成になっています。

笹谷：戸田さんとは帯広の競馬場で知り合ったのですが、なぜかとても気が合いました。戸田さんが「馬の映画を撮るなら神田日勝の絵を見なければダメだ」と言うので神田日勝記念美術館（鹿追町）に行き、開拓の暮らしについての話も聞きました。その暮らしの名残がばんえい競馬なんですね。それで、もっと深い部分を表現したいと考えて、一度北海道を離れたのです。トカラ馬や木曾馬など全国を見て回り、その中で自分自身が昔ながらの生活を探していることに気づきます。そうこうするうちに遠野に着いたということですよ。遠野に入ったところで、これでなんとか映画ができそうだという感触をつかむことができました。

——両作品は偶然同じ時期に進行し、東京での劇場公開もほぼ同時でした。お互いの作品をどうぞ覧になりましたか？

平林：『馬ありて』は最初DVDで拝見したのですが、自分の作品と比べると、馬の表情をかなりちゃんと撮っていて、率直に「ああ、もっと僕も馬の表情をきちんと撮ればよかったなあ」と思いました（笑）。それが一番強く思ったところですね。被写体である馬との

距離が近かった。馬という動物を強く感じさせていて、そこに引き込まれました。

僕はテレビを作ってきた人間なので、この映画もテレビ的なんです。押しつけはしないにせよ、ナレーションや言葉でメッセージとか方向性を制作者が意思表示するといった作りですよ。一方、笹谷さんの作品は説明過多にならず、情報過多にもならず、見ている人に委ねるという要素が強い。劇場で自分の作品を見たときに、やけにナレーションが多いなと思いました。もし次に映画を作ることがあったら笹谷さんみたいに作るかもしれません（笑）。

笹谷：『今日もどこかで馬は生まれる』を見て、私は「よくぞ作ってくれたと」思いました。よくこまめにメッセージを深掘りしてくださったと。多様なメッセージがある中でいろんな捉え方をして、こうなんだと決めつけるのではなく問題提起、すなわち「これから考えるんだ」としていることが意義深いと感じました。

馬を対象としたドキュメンタリーが同じ時期にできて、作った人間の世代もほとんど一緒だという、これは結構すごいことだとも思いました。ひとつの現象として見た場合、こういうことが起きたのはどういうことなのかなと考えていたのですが、世の中の転換点、馬も含めた転換点が今なのかなと、俯瞰してみたときにそう思ったのです。

——それぞれの作品について具体的にお話をうかがっていきます。平林さんの『今日もどこかで馬は生まれる』はにぎわう中央競馬のシーンで始まりますが、次のエピソードはいきなり屠畜場になります。

平林：競走馬の死は長らくブラックボックスだったところで、最後は食肉になるというところを誰も語り



『今日もどこかで馬は生まれる』より

たがらなかったわけです。ですが、屠畜は「競走馬のその後」を語るうえで避けて通れない。ドキュメンタリーを撮る以上、そこに入らないと“おままごと”になってしまいます。ですが難航しました。撮影を断られたのは50社近くになります。ある大手の食肉会社さんからは「企画は理解するが協力はできません」との手紙をもらいました。風評被害を恐れていたということです。映画ができたあと、どこそこの会社はサラブレッドを屠殺しているとの抗議や不買につながることを恐れていました。屠畜場側としてメリットはないですよ。映画に協力しても肉の宣伝にはならない。経営者としては妥当な判断です。

ですが屠畜場のシーンは外せないなので片っ端から探しました。いろいろ調べて行き着いたのが、ご協力いただいた新潟の会社、これは市営が民営にちょうど切り替わる時で社長が柔軟な方で、組織も人間も変えていかななくてはならない。自分たちがやっている仕事は社会にとって重要なことだと堂々と誇りをもってすべきであると。従業員の意識を変えるために協力できると。

——映画の中で誠実に話してくださっている関真さんはこの道50年という大ベテランなのですね。

平林：あの方は会社の中では仕事に厳しい人で、技術に優れています。屠殺は技術が必要で、下手な人がやると動物は苦しがるんですよ。仕事をプロとしてやるという意識を持っています。カメラを向けると、情景がうかべられる、しかも信条に触れられる言葉が出てきたということですよね。

実際に馬が屠殺されるシーンを入れるか入れないか検討はしましたが、結論出さないことにしました。出したらそれが全てになってしまっ、そのあとのいろ

いろな人の言葉が消されてしまう。屠畜場はあくまで問題提起で、それに対して「競走馬のその後」の問題に向き合っている人がたくさんいることを示し、私たちは何をすればいいんだろうと問いかける作品にしたかったのです。ですから、屠畜場のシーンは必要でも馬が亡くなるシーンを出さないということにしました。——続いて元競走馬の命を繋ぐ活動に長く携わっている引退馬協会の沼田さんの活動や、引退した元担当馬キリシマノホシを引き取った元藤沢和雄厩舎厩務員の川越靖幸さんとパートナーの佐々木祥恵さんの日常が紹介されます。心とみますが、当然すべての馬の「第二の生」を救うことはできないわけで、そのあたりは皆さん、どう考え方を整理されているのでしょうか。

平林：目の前の馬を助ける、ということを大事されているのだと思います。沼田さんの存在があって引退馬の問題は一步二歩と前進してきたのです。僕は尊敬しています。中には斜めから見の人がいて、引退馬協会といっても何頭救えているのかと言う人もいます。川越さんや佐々木さんもそう言われるのですが、何もしなければ1ミリも前に進まないですよ。目の前の一頭を救うことが“化学反応”に繋がると思うのです。

『今日もどこかで馬は生まれる』は今年の門真国際映画祭ドキュメンタリー部門で最優秀作品賞と大阪府知事賞をいただきました。キリシマノホシがまるで犬のように川越さんと遊んでいる場面があるのですが、審査員の方から「馬にはまだまだ知らない多くの可能性がある」と知らされ、印象的だった」というコメントをいただきました。

——映画ではそのあと、北海道日高の牧場を回ります。最初は新冠町にある大手の生産・育成牧場であるコス



『今日もどこかで馬は生まれる』より



『今日もどこかで馬は生まれる』より

モヴェーフームです。ここでは出産シーンとともに、働き始めて4年目の三宅優里さん、経験豊富な出口孝史さんがそれぞれのキャリア、経験での思いを語ってくれます。

平林：出産シーンを撮らせてもらいたいということで許可をもらっていました。しかし、あくまでも、業務員の邪魔はしないでくださいね、と言われていましたが、取材中に三宅さんが競馬情報ポータルサイトのnetkeiba.comで我々のことを知ってくれていたことがわかり、自然に話をさせていただきました。

——さらに代表の岡田義広さんの厳しいコメントが引き締めている感があります。「馬を特別視するのはちょっと違うだろう」「うちは丈夫な馬になるよう厳しく育成する。若馬にかわいそうだという人もいる。しかし競馬で成績を上げられず肉になるのがいちばん不幸だ」と辛口です。

平林：岡田さんは経営者としての話をもらいました。実は岡田さんへの取材許可はもらっていませんでした。彼が車に乗るときに走って追いかけて、インタビューを撮ったのです。ですが岡田さんは企画書を読み込んでいまして、取材のこともよくわかっていました。

岡田さんの言葉は信念に基づいて言っているし、あそこで働いている人のために言っていることもありますよね。作品は結構いろいろなところで上映をしていますが、競馬関係者が言うのは、岡田さんが言うことがみんなの本音だよねと。あの発言がカメラの前で本当によく言ってくださったと思います。屠畜場の関さんと岡田さんが、作品を引き締めてくれた。引退馬を何とかしなくちゃというメッセージだけではないものになったと思います。

——映画はさらに、コスモヴェーフームとはある意味で対照的な個人経営の荒木牧場（新ひだか町）に向かい、荒木貴宏さんに密着します。生産原価割れの200～300万円台でもなかなか買い手が見つからない現実まで。

平林：実は最初は荒木さんのところで出産シーンを撮らせていただくことになっていたんです。ですが頭数が少ないですから限られた撮影期間内では難しく、コスモヴェーフームでとなりました。ですが荒木牧場は荒木牧場で、密着していく中でなにか違うテーマを探そうと思って。撮っていく中で浮き彫りになっていったのが、個人規模の牧場さんと大きい牧場さんのいろいろなところでのギャップ—施設、設備、馬づくり、経済面のところとかが浮き彫りになってきて、そこが如実に現れるのがサマーセール（競り市）でした。——その荒木さんのところにも功労馬が戻っていて、「看取ってあげるのも使命というか……」とつぶやいていらっしゃいますね。

平林：荒木さんが功労馬を引き受けるきっかけは、引退馬協会の関係で1頭を試験的に引き取るようになったことです。「こんなに有名でもない馬をだれが助けるのかな？」と置いていたら、どんどん里親が現れてびっくりしたと。実際に見学にも来るじゃないですか。そこから荒木さん自身の考え方も変わっていかれたと思うんです。1頭の馬に対して、競馬という役割からはドロップアウトしている馬にもかかわらず、人と馬との関係が続いていくっていうのを目の当たりにして、そういうところから最期を看取ってあげるっていうことも使命という、そういう考え方に繋がっていかれたのかなあとは想像します。

——そして引退馬のことでは知る人ぞ知る浦河町の渡辺牧場へ。渡辺さんもずいぶん長いですね。前からご存知だったのですか。

平林：渡辺さんのところは、実は笹谷さんも……

笹谷：ええ、一度話を聞きに行ったんですよ。もちろん平林さんとは別々で。2013、4年でしたか。私も引退馬のことをちょっと調べていたんです。『馬ありて』を撮り始めてはいて、もっと人と馬との関係を知りたいと思い渡辺さんのところにも。本を出されていて（渡辺はるみ『馬の瞳をみつめて』桜桃書房2002）、それを読んで「すごいなあ」って思って。全部受け止める信念の強さを、お会いしたときに感じました。



『今日もどこかで馬は生まれる』より

平林：はじめ渡辺さんからはお断りされたんです。「実は数年前に、ばんえいの馬を撮る方からも協力いただけないかというお話をいただいたのに、私は協力したい気持ちはあったのですが、ばたばたしてたいへんな時期だったのでお断りしちゃったんです。なので平林さんの方の映画に協力するとその方を傷つけてしまうので」と。

笹谷：えーっ そうなんだ！

平林：で、帰りの車でスタッフと「その人って誰だろう？」って。

笹谷：私が行ったときは、とにかく調査の最中だったんです。何かあったらご協力いただけないでしょうか、と。「映画はやだな〜」ってその時言われて。まあ、また連絡させてください、みたいなうやむやに帰ってきたのですが。

平林：一度笹谷さんと一緒にイベントをさせていただいたときに、渡辺さんに連絡をしたところ、すごく喜んでいらっしゃいました。

——平林さんは渡辺さんをどうやって知ったのですか？

平林：本も読んでいますけれど、引退馬協会の沼田さんとのお話し合いのなかで、「渡辺さんのところは見に行きましたか？」というところだったと思いますね。

行ってみると、想像以上でしたし、セントミサイル（渡辺牧場生産で引退馬協会引き取り馬）の埋葬シーンがありますが、実は iPhone で撮っているんです。あの時はまだ撮影許可が出ていなくて。

渡辺牧場には一度見学に行き、そのとき「こういう映画を撮っているんですけど」ってお話をしたのですが「ちょっと映画は……」って言われて。また別の日にかがいがい、もう一度オファーを出したんですが、その時にさっきの話で「前にお断りした方もいるんで」と。そうするうち、お訪ねしたときは元気だったセントミサイルが具合が悪く闘病しているという話を聞き、スタッフが「鶴をみんなで折ってお見舞いに届けるか」という話をしていたところ、あらためて北海道に行く何日か前に亡くなっちゃった。滞在している間に葬儀があるということで、折った鶴もあるので「ご迷惑でなければ参加してもいいですか」ということで参加して、あの光景を見たときに、まず、亡くなっている馬を見ること自体びっくりしました。さらにその亡骸を、狭い山道通って上げていくんです。「これをやってるんだなあ、この人は」という感嘆がすごくあって「どうしても映画に入れたい」と。撮影で行っているわけではないので iPhone で記録用ということで撮らせていただき、後日もう一度渡辺さんのところに行つて、こういうふうに描いてこういうことを取材したい、だから力を貸してくださいとお願いしたところ、「わかりました」と。iPhone で撮った映像も使わせていただけることになりました。

ほんとに、すごい人ですよ。笹谷さんがおっしゃったように、すべてを受け止めるとああなるっていう、「自分ができることをやる」というスタンスは皆さんそうなんだけど、できることの幅を極限まで、自分という人間が押しつぶされるギリギリまで拡げて受け止め

ている人が渡辺さんなんでしょうね。

——映画では最後の方出てくるジオファームですが、最初のとっかかりだったわけですね。人を乗せなくても馬が暮らしていけるという。あれを最後にもってきたのは？

平林：希望といいますか、やはりこの映画のテーマは引退競走馬の「その後」。これが現実だけれど、しかしそれじゃためて何とかしようと思っている人がたくさんいる、そのうえでどうしようかという映画なんで、最後は、働けなくなった馬でもキャリアを得られる仕組みがあるということを紹介して、ちょっとでも進んだところでみんなで話し合いができればという希望を託して、最後にもってきたということです。

——映画にはほかに、元競走馬をパートナーにしている馬術選手の初田理奈さん、そしてこの映画の陰の功労者である調教師の鈴木伸尋先生も「以前は勝ちにこだわりましたが、今は「馬が気持ちよく走ってくれる方に生きがいを感じる」とお話をされています。

平林：統計上は競走馬の引退後のキャリアとして多くが「乗馬」になっています。実際にそういう馬もいるわけで、この作品として初田さんのシーンは必要でした。

鈴木先生については、ご本人がどう言われるかわかりませんが、この映画のエグゼクティブ・プロデューサーみたいな感じですね（笑）。僕が知らない交渉とか説得とかお声がけとか、多分してくださったんじゃないですか。水面下で動いてくださった。鈴木先生の存在はほんとうに大きかったです。

——それでは『馬ありて』についてうかがっていきます。最初に出てくる北海道池田町のばん馬生産者・戸

田富治さんは、風貌に味わいがありますし、競馬場厩舎の控え部屋のようなところで「日本人は悪いぞ、アイヌの北海道を取ってしまったらさ、朝鮮半島も。秀吉の時代から悪いんだから」などと気炎をあげて、面白い人ですね。帯広競馬場でたまたま出会われたとのことですが。

笹谷：戸田さんて、田舎において言葉をもっている人で、ですから煙たがられる瞬間もあるんですよね。ですが、私は波長が合ってしまったんです。

ある調教師を頼ってとりあえず厩舎に行って話をいろいろ聞いていたら、たまたま遊びに来たのが戸田さんでした。調教師さんが「この人、馬博士だよ。馬のことならなんでも知っている」という話をされて、「じゃ、ちょっとまた話を聞かせてください」と。だいたい前なのでうろ覚えなのですが、後日とりあえず電話したら、「神田日勝のところに行ったかな。まずはそこからだよ」って言い出して。それで日勝の絵を観に行き、あらためて「じゃあちょっと日々の生活を撮らせてほしい、生活風景というか、日々の日課を撮らせてほしい」と頼んで、インタビューと一緒に日課を撮らせてもらって。それでたまたま今育てている馬が競馬場に入るよってという話で、じゃ、まずとっかかりとしてこれの密着だなと思って。それが映画の中で追いかけていくことになるハルイチバンです。

——では偶然の繋がりでは始まっているのですね。

笹谷：そうです。何も考えてなくて、何が目的なのか自分でわからないまま、とにかく馬というものをモチーフに美しいものを撮りたいということだけでした。それで競馬場に行ったら戸田さんに会い、とにかく戸田さんと馬の日々に密着しました。



『馬ありて』より

——戸田さんには圧倒されませんでしたか？

笹谷：圧倒されました，やっぱり。「ああ，こういう人たちがやってるのかあ」と，本当に圧倒されました。

それまで取材よりも調査ばかりしてたんです。予算とか度外視して，いろんな人に会って，話を聞いて。何回も何回も行ってたんで，ほんとにいろんな方に会いました。90歳ぐらいになってもずっと馬をつくる方もいました。すごく規模が小さくて「オレのウチは食肉しかやらない」という方のところにも行きました。もう，ほんとうにいろんな人がいるんだなあというのを目の当たりにして，で，その中で戸田さんに出会ったわけです。

——戸田さんのところは生産頭数はどのくらいなのですか。

笹谷：私が行ったところは1頭か2頭。昔は結構手広くやってたと思うんですけど。戸田さんは自分たちの世代が競馬をわーっと盛り上げたけど，馬にとっては果たしてそれでよかったんだろうかという葛藤をもちつつ，だけどつくり続ける。そんなせめぎ合いを常にされていました。だから「人間がいちばん悪い」って言い切れるんです。結局今も競馬場に入出入りして，それこそ血統のアドバイスとかしているみたいです。加えてホース・ウィスパラーっていうのも。ストレスがたまって調子が悪くなったばんえい馬を1か月ぐらい預かってガス抜きさせる。どういう仕掛けか分からないですけど。たぶんマッサージと広い牧場でのんびり過ごすとか，いろいろあるんです。それをやって，厩舎に返したらすごく調子がよくなるようで，定評があったみたいです。

——ハルイチバンが初めてソリをつけて，大暴れしながら走っていくシーンで，遠景に帯広市街地のビルが見えます。東京の人などは「え？」っと驚く風景かもしれませぬ。

笹谷：地平線の向こうにビルがある……。ある意味で象徴的ですよ。自然界の馬がビルに向かって走って行く。戸田さんの日常に密着しながら，ハルイチバンが競馬場に入ってソリを挽く訓練を受け，競走馬になるための能力検査のレースで合格する場面まで撮ることができました。

ですがレースが終わったとき，「ここが映画の主軸になってもいけないな」という直観がありました。戸田さんからも「ばんえいだけじゃ人と馬とのかかわりは

撮れないよ」と言われていましたし。もっと馬のことを知らないといけない，あくまでばんえい競馬はとっかかりだなと感じて。では，もっと深いところにはどうしたら行けるのか。それで全国いろいろなところに行き始めたんです。

——その直観というのは？

笹谷：誰かに言われたのですが，ばんえい競馬のドキュメンタリーを撮ると「スポ根」ものになっちゃうと。たとえばテレビ局のドキュメンタリーですと「型」があります。ですがそういうのに納まることにはとても抵抗があった。嫌でした。実は私もテレビ局の報道出身です。カメラアシスタントをやっていましたので，その方法論が身体に染みついている。だからこそ，そこから抜きたい。ばんえいを起点にばんえいから離れて，もっと深く人と馬を考えたいと思いました。

そう考えて全国をいろいろ巡っていくなかで，遠野に行き着いたわけです。とにかく昔から続いている営みの続きが撮りたいと，ひたすら考えていました。現代はあまりに醜いものが多い。自分の個人的なこだわりですが，美しいものを撮りたい，それを美しく切り取りたいという気持ちがすごく強いんです。そしてやはり，昔から続いているものというのは美しい。作為がないというか，なにかこう，日々暮らしていくために，自己実現などとはまったく別のところで，自然の中で，ただただ仕事をしている……。表現がすごく難しいのですが，自然に，仕事に仕事をさせられている人，そういう人たちへの憧れが私にはあり，その中で遠野に馬搬があるということを知りました。

——それは遠野に行って出会ったということですか。

笹谷：いえ，それ自体はなにかで調べていましたね。それで遠野に初めて行ったとき，実際に馬搬をされている岩間敬さんという方をお訪ねしました。比較的若い方で，遠野馬搬振興会の事務局長をされていて，現在も馬搬を広めようと頑張っている。馬と人がどうやって生活していくかを広めているわけです。私としてはやはり，昔から続く流れの中で仕事としての馬搬というものをどうしても見かった。それで「そのような方はいらっしゃいませんか」とうかがったところ「じゃあ，僕の師匠を紹介しましょう」とて，見方芳勝さんに引き合わせてくれたのです。ですが行ってみたらぜんぜん言葉が通じなくて。なに言っているのか本当にわかりませんでした（笑）。ですので映画では



『馬ありて』より

見方さんが話されているところに字幕をつけています。本当はそんなことはしたくなかったのですが……。

——見方さんのご自宅自体、人と馬がひとつ屋根の下で暮らしていて、かつての農家の姿をとどめています。

笹谷：曲り家（まがりや）といって、入るとすぐに馬房があり、その横に人間の住み処がある。遠野のあたりは南部曲り家で、日の当たるところに馬がいるようになっているんです。

——映画は淡々と見方さんの暮らしに寄り添い、馬搬の現場にも入っていきます。

笹谷：戸田さんの撮影では始めのころ、社会の流れの中で馬はどうなっていくのかみたいな、いわば「大文字」のことをことさら聞いてしまったという反省がありました。そうじゃなくもっと生活の部分、人がメシを食う、どうやって食うか、朝起きたときに馬にどう声かけるのか、そういう生活風景がこの映画にとっては真実だなと。ですから、見方さんのときはできる限り何も考えずに取材していました。とりあえず撮らせてくださいみたいな感じで。思考をどんどん削いでいこう、作為をなくしていこうと意識していました。

見方さんは周りのことにあまり興味をもたないんです。私のことにしてもそうで、何回も通いましたが、行く度に「だれだったかなあ」みたいな感じ。自分が撮られることも別に興味なく、私についても興味がないんですよ。ですからほんとに自然体で山に向かっていくところがわりと早い段階で撮れて。この見方さんの自然に対する作法というのはどういう流れで生じているのかということを考えさせられました。

——馬搬がかなり危険を伴う作業であろうことも伝わってきます。実際、見方さんが何気なく「山で5頭ぐらい殺したかなあ」って何の感傷もなく話される場

面があります。それだけに凄みもありますし、かえって馬との近さを感じます。

笹谷：そうなんですよ。作業現場で馬に「こらっ！」とか言ったりして、傍からは厳しくあたっているように見える面もあるんですけど、根底にあるのは馬は「同胞」、人間より馬の方がオレのこと分かってくれるよっていう気持ちがあるんでしょう。「5頭ぐらい死なせた」という話、私も「すごいことさらっと言うな」と思いましたが、なんとというか、「一周している感じ」ですかね。いちいち悲嘆に暮れてるところを見せても意味がない、それは人間のコミュニケーションで、馬寄りのコミュニケーションとしては、感傷をこめて私などに伝える意味がない。それが馬側の人間というものなのでしょう。人間が動物に近くなっていくといつか……。ああいう感じで年とれたらいいと思うんですが。

——遠野ではさらにオシラサマ伝承にも分け入っていきます。伝承では、馬と飼い主の娘が恋をして夫婦として結ばれたものの、馬は娘の父親に殺されてしまいます。馬と娘は寄り添って天に昇っていったという信仰が、お年寄りの口から語られていきます。



『馬ありて』より

遠野にいて、なにか不思議な気持ちになるというか。柳田國男の『遠野物語』にも人間以外の存在が多数登場しますが、遠野の森を散歩しているとゾクッとする時間、何者かに見られているような恐怖を感じることがありました。「あ、これが遠野の感覚なのか」と思って。その根源的なものはなんだろうと深掘りしていき、オシラサマに行き着いたんです。

じゃあ、オシラサマってなんだろうかと思い、オシラサマの像（木の棒に布を巻き重ねたご神体）を持っている人たちを調べ、「見せてもらえませんか」と訪ねました。その中で、いわば日本の農村の原風景を感じました。ですが映画としては、遠野という場所が特別だとは言いたくない。もともと遠野的なものは全国いたるところにあったのだろう、今の日本はとても大事なものを失ってしまったのではないか。そのエッセンスを映画の中で言えたらと思い、オシラサマを入れました。——そして3人目の重要登場人物が北海道穂別町の多村稔さん。馬喰さんだけに、札束を持って馬を買付けに行ったりして、見方さんとは対照的に俗っぽいですね（笑）。

笹谷：初めてお会いしたときは、「コワモテだな」と思っていました。粗野な部分もあるんですが、やはり、なにか惹かれるものがありました。なんというか、馬喰として今の時代を泳ぎながらも、馬が好きで、馬に携わっていることにすごくプライドを持っている。——戸田さんと見方さんだけだと、馬に関わる現代の仙人二人の紹介みたいになってしまいますが、多村さんのおかげで観る人との距離が縮まります。

笹谷：そうなんです。もっといいシーンあるんですが、映画ではマイルドにした感じです。でも、「俗」に

こそ本質があるという、その一端を担ってくれたらいいなと思って。見方さんと戸田さんだと「これこそ日本」「これが答えだ」ってなりかねない。でも、それを言っても仕方ないのであって、俗を感じる部分でも馬という存在が引き継がれているというところを言いたいと思いました。

——馴染みらしい牧場に行って値段交渉をして即金で買う場面があります。あれは肉にする馬ですね？

笹谷：う～ん、謎なんです。あれ、ポニーだったかな？

——ポニーも好きな人がいて、北海道中で飼っている人がたくさんいます。

笹谷：肉になる可能性もあります。取材中聞いたのは、ポニーの肉がおいしいんだと。

平林：へえ～、ポニーがおいしいんですか？

笹谷：らしいですよ。

——映画に出てくる多村さんの馬運車では、進行方向に対して馬を横向きにして隙間なく積みます。あれは、屠畜場に運ぶ牛と同じ運搬方法ですね。

笹谷：ああ、そうですね。見方さんも縦だし、戸田さんも縦だったと思います。多村さんだけ横なんだ。——そういう多村さんが、地元の穂別で開かれる草ばんば競馬大会に一所懸命なわけです。

笹谷：今も北海道各地に草ばんばがあることは以前から知っていて、それは撮りたいなと思っていました。それで長野の「木曾馬の里」関係の女性から「すごく優しいおじいさんですから」と紹介してもらって。会ってみたら、「優しいおじいさん？」という人が出てきたわけですが、いや、多村さんは本当に優しいところがあるんです（笑）。



『馬ありて』より

——そして念願の草ばんば競馬が撮れた。

笹谷：とにかく驚きました。あれ、誰も儲からないんですよ。みんなが出費をしつつ、ただ単に純粋に娯楽に向かっていくというのは本当に新鮮でした。こんなに集まるのかって。馬と一緒に10時間ぐらいかけて来る人がいますからね。

——画面で確認したところ、剣淵、士別、日高、岩見沢、安平、札幌、鶴川、清水、遠軽、紋別……。

平林：すごいですねえ～。

——紋別から穂別までだと、馬を積んだら8～9時間かかるんじゃないですか？

笹谷：言っていました。8～9時間かけて来るって。ただただ圧倒されましたね。

——大会のために多村さんが穂別の街で寄付を集めている場面もありました。けっこうみんなお金出してくれるのですか？

笹谷：うん、けっこう出していました。地元の人たちが「やろうぜやろうぜ」みたいな感じであの草ばんばをやっていたのが印象的。

——かつての農村での馬との暮らしの中で、年に一度のお祭りか何かで馬と遊ぶ—それが今もああいう形で残っているのでしょうか。

笹谷：そうですね。なんで残っているのかわからない。わからないですが、切っても切れない部分があるんでしょう。大会に集まっているみんながみんな、馬がいなくて生きていけないというわけでもないんですが、それでも馬が生活の一部に根付いている、それが当たり前という。そうなんです。ひたすら当たり前なんです。私がびっくりすることでも。

——それぞれの映画についてうかがってきましたが、改めて話し合ってくださいませんか。

笹谷：『今日もどこかで馬は生まれる』の深度、たとえば屠殺場のシーンを撮っていることが本当にすごいと思います。

私もいろいろ調べて、やはり屠畜に向かわざるをえないかとも思いました。で、いろいろ調べていくなかで、結局、そこにはアプローチしなかったのです。それは、平林さんがおっしゃたように、屠畜そのものが濃い映画になっちゃうから。この映画でいいたいのはそこじゃない。でも『今日もどこかで馬は生まれる』を見たときに、「ああ、ここまで撮るのか」という、ジェラシーといったら変な話ですが……。

それから渡辺牧場のところで、クレーンで馬の亡骸を持ち上げているシーンを撮っているのは、撮影者としてすごいなあと、単純に思いました。

平林：たぶん僕はプロデューサー気質なんです。ずっとテレビ番組を作っていたのですが、途中からチーフディレクターになってしまったことで、現場は余り出ていかなかったりとか。それがやり方に出ていて、それが良くも悪くもなんですね。とにかく合理的というか。さらにディレクターとしてはけっこう理路整然と説明して進めるタイプです。ですから、ドキュメンタリーのディレクターとしては相手を緊張させるタイプなんです。笹谷さんがおっしゃっていた、ありのまま、この人のほんとうに流れるように生きているところに、たまたまカメラが回っていたみたいなの、そういうやり方は、僕はたぶんどきないです。僕がいること、カメラがいることを取材対象が意識してしまう。そこは違うところで、僕からするとすごく羨ましいところです。

——映画の方法論も対象も違うのにお二人がそれぞれ馬と人の関係性に対峙したとき、根っここのところで近い。『馬ありて』の冒頭に「走るか 肉になるか 二つの運命を背負い」という文言が提示されます。そしてお二人とも馬の誕生を撮り、埋葬を見つめています。喩えるなら、現代における馬と人というテーマに対して西から行くか東の峰から進むかという。異なるアプローチから、響き合うテーマが浮かび上がってくる手応えがありました。

平林：「馬と共に生きる人々に聞いた」をキャッチコピーにしたのですが、笹谷さんの映画も馬とともに生きる人の映画。馬とともに生きるということは当然そこにいる馬の命という問題も当然入ってくるわけです。ですから、生まれるところと、その最期と。その命に対して人間の感情とか心がどう揺れているかというのが作品に出てきてますよね。

笹谷：やはり、馬と人の関係性を撮るなら外せないでしょうね、生まれるところと……。

平林：うん、経済動物というか……やはりそうですね。

笹谷：その葛藤というのは外せなくて。私はとにかく現代っていうものを否定したい人間なので、過去のもの撮っているのかもしれない。『今日もどこかで馬は生まれる』は、現代から未来に向けての投げかけ、すごく優秀な投げかけをしていると思います。

馬事往来

作業療法士から見たホースセラピー 馬との活動

石井孝弘



石井孝弘 (いしい たかひろ)

作業療法士, NPO 法人 RDA Japan 理事, 日本感覚統合学会常任理事インストラクター, アメリカ乗馬療法協会 Level 1 Hippotherapist, 専門は発達障害, 感覚統合理論と実践, 動物介在療法, 乗馬療法など。その他保育園, 幼稚園, 小学校などで子どもたちの支援, 教員保護者などに対する講習会講師を務める。現職は帝京科学大学医療科学部作業療法学科教授。

1. はじめに

障害のある人が馬とかかわる活動が, 日本でもいろいろな場で広がってきている。乗馬クラブなど乗馬の機会を提供している施設もあるが, それに加えて現在では, 放課後等デイサービス施設, 発達支援施設などでも行われている。また, 小学校などでも児童生徒が馬と触れ合う機会を設けていたり, 特別支援学校などでも実施されている。

乗馬活動が, 障害児・者にとって心身機能に良い効果をもたらすこととして広まってきたといえるであろう。

筆者がアメリカの障害児・者が乗馬を行うことができる施設をいくつか訪問した際には, すべてが障害児・者のみが利用できる専用の施設であった。「一般の人が行う乗馬と障害児・者が乗馬を行うのでは, 馬の使用 방법이異なるので兼ねることはできない。かかわる障害児・者にとっても, 馬にとっても重要なことである」とのことであった。今では日本でも障害児・者を対象とした専用の施設や実施団体が増えてきている。

筆者が勤務する大学では, 学生の活動として, 近隣の老人福祉施設などに出向き, 小動物を介在した活動などを行っている。この活動に馬を施設に連れていき介在活動を実施したこともある。日常では見ることでできない笑顔が見られたり, 動物に触れることをきっかけに話し始める場面なども見るようになった。

日本では, 日常的に馬に触れる機会は非常に少ないが, 高齢者の中には馬を飼っていた経験者もいて, 懐かしがっていた様子もうかがうことができた。このようにいろいろな機関が障害児・者が馬とかかわる活動を提供していることから, 今回, 作業療法士として障害児・者への支援を専門とする視点から, 乗馬および人が馬とかかわる活動について述べることにする。

2. 日本における人が馬とかかわる活動

人が馬とかかわる活動について, 日本ではいろいろな呼称が存在する。広く一般的には「乗馬」は誰もが知っている呼称である。対象が障害児・者である場合には, 以前は「障害者乗馬」が使われていた。

現在は, 障害者乗馬, 治療的乗馬, Therapeutic riding (以下: セラピューティックライディング), 乗馬療法, Hippotherapy (以下: ヒポセラピー), ホースセラピー, などが用いられている。しかし, その定義については明確ではない。

現在, 日本で最も使用されている呼称は「ホースセラピー」と思われる。本来であれば Equine-assisted therapy と表記されるのであろうが, 現在海外でも, Equine therapy, Horse therapy と表記することも一般的になっているようである。

呼称はいろいろあるものの, 現在日本で多く使用されている「ホースセラピー」の位置づけは, 治療など医療行為ではないが, 障害児・者の心身機能に良い効果をもたらす活動としてとらえることができる。具体的には, 競技やスポーツとしての活動, レクリエーション, 教育, 福祉などの場における活動である。

河村らは, 発達障害の診断を受けている子どもに対して乗馬プログラムを実施した結果, 「運動」と「馬への態度」の項目において好ましい変化が認められた¹⁾としている。

倉恒らは, 学生 48 名を対象に, 乗馬に伴う疲労回復効果を検討し, 疲労感, 気分の落ち込み, 意欲, イライラ感, 緊張, 不安, 活力, 体調の自覚症状は乗馬群がコントロール群と比較して統計学的に有意に回復していることが確認された²⁾としている。

現在の日本におけるホースセラピーは, 障害児・者のみならず, 一般にも広く心身機能等へ効果のある活動としてとらえられている。

3. 海外におけるセラピューティックライディング

障害児・者に対してセラピューティックライディングに関するアメリカの組織に Professional Association of Therapeutic Horsemanship International (以下: PATH) がある。PATH は、セラピューティックライディングは、特別なニーズを持つ個人の認知的、身体的、感情的、社会的幸福に積極的に貢献することを目的とした馬支援活動とし、健康、教育、スポーツ、レクリエーション、レジャーの分野でメリットをもたらすとしている³⁾。

ヒポセラピーに関する組織である American Hippotherapy Association (以下: AHA) では、セラピューティックライディングは、レクリエーションであり、乗馬レッスンである。障害を持つ個人に適応する⁴⁾としている。

筆者がアメリカのセラピューティックライディングを提供している施設を訪問した際に共通していたのは、セラピューティックライディングは、障害児・者の乗馬技術の習得であると述べていたことであった。それに加えて、結果として心身機能に良い影響を与えているとも述べていた。

このようにアメリカでのセラピューティックライディングのとらえ方も明確であるとは言いきれない側面を有している。

アメリカでは、セラピューティックライディングを実施する際には、PATH の資格を有しているスタッフが担当する。PATH では、PATH Instructor Registered Riding Instructor Criteria⁵⁾ を設けている。

基準は、Equine management, Horsemanship, Instruction, Teaching methodology, Disabilities の5項目とし、最後の1項目は障害についての知識に関する基準である。この基準には、人体解剖学として骨の部分を特定できること、運動学用語の理解、ライダーの持っている障害の定義・原因・特徴・指導方法を知る、姿勢調整の取り扱い技術を理解し実証する、身体力学を理解して実証する、などが含まれている。このようにインストラクターの持つべき基準には、対象が人であり障害児・者であることから、基本的な人体に関する理解に加えて障害の理解も含まれている。

アメリカ以外の障害者乗馬に取り組んでいる国に基本的な考え方や具体的な取り組み方法に大きな差はないと思われるものの、異なる面も有している。

4. 対象としての障害理解の必要性

日本ではセラピーもしくはセラピーといわれる人に対するかかわりは数多く存在している。辞典などでは、セラピーとは主に「治療、療法、薬品や手術を用いない心理療法や物理療法」と説明されている。セラピーの主な目的や定義では、人々の生活の質を高めるアプローチ、病気や傷を治療したり、心身をリラックスさせたりする療法、医学的エビデンスを基礎とした健康維持・増進等に活かしていく取組などといわれている。このことから、セラピーは障害の有無に規定されることはなく、提供可能でありさらにその効果が期待できるものといえよう。

ここで重要なことは、健常者であればそのかわり方は大きく異なることはないが、障害児・者を対象とする場合には、個々による障害は心身機能ともに異なることから、個別の対応方法を検討したうえで実施することが重要といえる。PATH においてもインストラクターが有すべき障害に関する知識等の基準は詳細にわたり規定されている。

身体障害は多種多様であり、ホースセラピーの対象として実施する際には、個々の障害の状況の把握は重要である。これは発達障害、知的障害、精神障害についても同様である。また、リスクの観点から個々の状況によっては、実施困難な場合もある。

効果を期待するかかわりであることから、プログラム立案のためには、個々の障害状況の理解と把握は必要といえる。

馬を介したレクリエーション、スポーツ、青少年教育、療育などの活動を行っている4団体が、協同して2019年11月に開催した、第1回「馬のいる領域」研究集会のテーマが「馬のいる領域 創ろう笑顔のネットワーク」であることから、共通に目指しているものに対象児・者が「笑顔になれる」ことがある。結果としてそれが治療的なかわりとなり一定の効果につながっているケースも多い。

5. 人と馬に関する専門家がかわることの重要性

ホースセラピーは馬と対象である人の両者についての専門家の協業で成り立つ。馬という動物としての特性の理解、さらに実際に用いる馬について理解していなければならない。

対象は障害児・者であることから、障害の理解と把

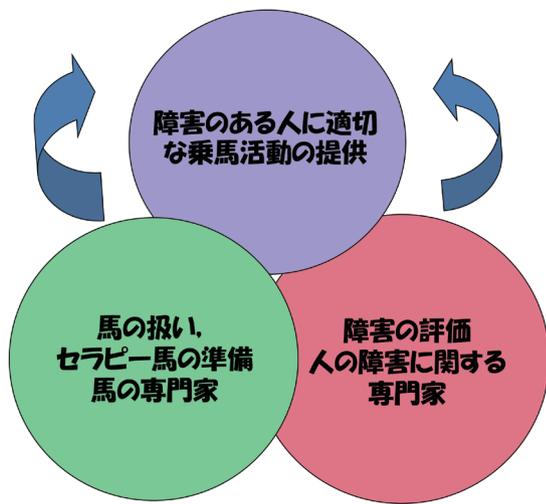


図1. 人と馬に関する専門家のかかわり

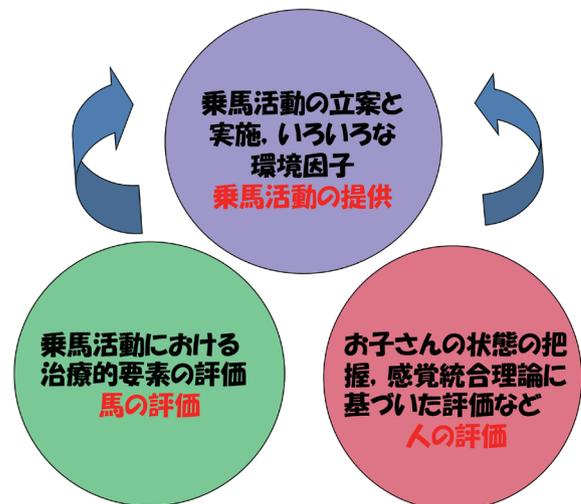


図2. 人の評価と馬の評価により実施可能なホースセラピー

握が必要である。この両者について一人のスタッフが知識技術として有している場合には別だが、基本的にはそれぞれの専門家が協業することが望ましいと筆者は考えている（図1）。

ホースセラピーとしての「馬とかかわる楽しい活動」に焦点を当て、具体的な方法について述べていきたい。

私たちが楽しいと感じる情動の変化は、現実その場で起きていることに起因するものであれば、それは感覚刺激の受容によるものである。

身体障害児・者は、障害の状況が異なることから、一般的には健常児・者が楽しいと思えるようなことであっても、身体障害やそれに起因することが原因で楽しいと思えないことがある。

また、発達障害児・者にとっても一般的に楽しいと思えるような感覚刺激が、不快と感じてしまうことがある。

これらについて、ホースセラピーを提供する側が十分に知っておくことは大変重要なことである。一般論で対応しようとする逆の効果につながりかねない。

例えば、発達障害児の中には、前庭覚刺激に対して非常に敏感な児がいる。前庭覚刺激とは、地球の重力がある環境で自分自身が動くことで受容可能な感覚刺激である。馬に騎乗することや、騎乗して移動するときにも受容できる刺激である。この刺激に過敏に反応する児は、騎乗して馬が常歩での移動でも恐怖感を感じてしまうかもしれないし、馬の背に乗ることさえも恐怖に感じてしまうかもしれない。

逆に、非常に感じにくい児では、常歩では刺激を受容しても楽しい情動につながらず、速歩、駈歩程度行わないと楽しいと感じることができない児もいる。

馬によって、騎乗者へどのような前庭覚刺激を提供できるのかは異なる。前後、左右、回旋の動きや、速度、歩度などの馬の特性に加えて、リーダーが馬を操作することで変化をつけることが可能である。これらを勘案すると、人の評価と馬の評価により実施可能なホースセラピーといえる（図2）。

6. 馬に関する評価と人に関する評価、諸作業の評価

アメリカのセラピューティックライディングを実施している施設では、馬に関する評価表を作成しているところがある。その評価表に示されている項目の主なものは以下の通りである。

馬名、用途、騎乗者の体重制限（鞍により異なる）、使用可能な鞍、乗馬療法の対応の可否、歩様、体格、性格、従順性、動きの特徴、以前のトレーニング方法、環境適応、反応性、過去の怪我、病気などである。

これらを把握しておくことで、対象児・者の心身機能、目的に応じて使用する馬を決めることが容易となっている。

対象児・者の心身機能の評価に関しては、筆者は肢体不自由と発達障害、それぞれの評価表を作成した⁶⁾。肢体不自由用は身体部位、姿勢、運動機能、コミュニケーション等、発達障害用は、行動、行為、対人関係、コミュニケーション、情動の項目等の評価を行いまと

表1. 馬とかかわるうえでの諸作業の分析

諸作業	主に経験できる感覚刺激
馬糞の片づけ	固有受容覚刺激, (触覚刺激)
ブラッシング	(固有受容覚刺激), 触覚刺激
裏堀	固有受容覚刺激, 触覚刺激
頭絡の着脱	順序性, (固有受容覚刺激), (触覚刺激)
鞍の着脱	順序性, 固有受容覚刺激, (触覚刺激)
飼い付け	固有受容覚刺激, (触覚刺激)
その他	温度覚刺激, 嗅覚刺激

太字は比較的強い刺激, ()内は比較的弱い刺激。

めることが可能である。

ホースセラピーでは対象児・者が騎乗することのみではなく、関係する諸作業にも治療的意味がある⁶⁾。例えば、牧場内の檻糞を集めることは注意欠如多動性障害の対象児・者の中でも、固有受容各刺激に対して低反応性の機能を持っている対象児・者には、求めている感覚刺激を提供できる機会になる。馬とかかわる活動に含まれる主な諸作業と、その作業に従事することで得ることが可能な感覚刺激も把握しておくことが重要である(表1)。

7. ホースセラピー場面のケーススタディー

ここでは具体的なケースを通して、障害の特徴およびプログラム立案と実施、結果等について提示する。

全国におけるホースセラピーを実施している団体等へのアンケート調査⁷⁾では、対象としている障害として比較的高い比率を示している脳性麻痺、および発達障害として、自閉スペクトラム症の対比的な2例を取り上げた。

紙面の都合上一部抜粋した形で提示する。

<ケース1: 脳性麻痺>

- ・上肢, 手指, 下肢の麻痺は筋の緊張が高い。
特に自発的な運動や努力性の運動時に筋の緊張が高くなる。そのため、特に股関節が開きにくくなることに加え、動かすことが難しくなってしまう。
- ・日常生活上の制限
麻痺が強いこともあり、左上肢, 手指を日常生活で自発的に使用する頻度は少ない。

いくつかある目的の中から、今回は以下の3項目を取り上げた。

#1: 股関節を開きやすくする。

脳性麻痺の特徴として、下肢の各関節の動きは筋の緊張が高くなることで動かしにくくなる。さらに努力をすることや、精神的な緊張状態では、筋の緊張はより高くなり、運動の困難さはより強くなる。

股関節が開きにくいのであれば、横乗りの選択もあるが、ここで重要なことは、現状を把握したうえで、方法を決定することである。そのためには、騎乗する前の股関節の緊張状態、ストレッチを行うことで、多動的に股関節が開くことが可能なかのチェックと筋短縮の状態を把握し、現状の改善方向に向かう方法を選択することである。

そのために、股関節が開く範囲とストレッチにより開く範囲などに合わせた馬体の幅を選択することが理想である。若干股関節の開く範囲が馬体の幅よりも狭いとしても、騎乗することで持続的ストレッチになることと、何かの要因で筋が収縮しようとした際に抑制することが可能である。

#2: 左上肢, 手指を日常生活の中で使用する頻度を高める。

脳性麻痺は出生以前もしくは出生直後からの障害であることから、麻痺があることで、脳の発達に必要な感覚刺激を遊びを通して受容することが困難である。このことは自分自身の体をイメージすることを困難にしていることから、自分自身の体としての認識も獲得しにくく、日常的に使用する頻度が低下してしまうことがある。さらに上肢, 手指の麻痺があることも加えて使用頻度はさらに低下することとなる。自分自身の体のイメージづくりには、触覚刺激の受容が重要であることから、乗馬前後の馬に触れる機会をブラッシングおよび騎乗時には馬への愛撫の機会を増やした。また手綱操作を早い段階から取り入れることで、両側上肢, 手指を使わざるを得ないプログラムとして実施した。日常生活の中での左上肢, 手指を使う頻度が増え、左手で食事時にお茶碗をおさえたり、首元にあるボタンをかけることもできるようになった。

#3: 姿勢保持の安定性を得る。

椅子座位などでの姿勢保持では円背の傾向となり、そのこともあり上肢手指の機能を十分に発揮できない状況と思われた。

姿勢保持には地球の重量や出生直後から抱っこして揺らしてもらうことや幼児期ではブランコ、滑り台な

どの遊びを通して、前庭覚刺激を受容することが重要である。重力との関係で前庭覚刺激を受容することで、脳は姿勢が崩れたことを知り、姿勢保持に必要な体幹腹部周囲筋の筋緊張を用いて姿勢を保持する。

騎乗し、常歩にて直線のみならず、スラロームや左右へ曲がることや、発信と停止、これらを速歩も組み合わせて実施することで、前庭刺激を提供した。

骨盤の後傾も円背を助長してしまうことから、今回は鏡の長さを長くし、股関節の屈曲角度を小さくする（膝が腹部から離れた位置に股関節角度を保つ）ことで、骨盤の後傾傾向を改善し、体幹腹部周囲筋の筋緊張を高めた。

<ケース2：自閉スペクトラム症>

・日常的に多動性が観察される。

前庭刺激に対する低反応性を有している。

回転後眼振検査：眼振（一）、眩暈やふらつきなどがなく、回転直後閉眼立位可、歩行可。

・乗馬時の覚醒低下

常歩では、笑顔は観察されず、欠伸が観察された、速足で笑顔が観察され、繰り返しの速足を求めてくる。

いくつかある目的の中から、今回は以下を取り上げた。

#1：日常的な多動性の軽減

このケースは、日常的な多動性の原因が、前庭覚刺激の低反応性にあると考えられた。

脳は、前庭覚刺激を情報処理し適応行動を行うには充分に受容できていないと思われる。そのために前庭覚刺激を自ら可能な方法で受容しようとする姿が他者からの観察では多動と判断される行動となっていると考えられる。

また、乗馬時に覚醒が低下し欠伸が観察されることは、常歩で受容可能な前庭覚刺激が、覚醒を低下させる刺激となっていると思われた。さらに、速歩で笑顔が観察されたことは速歩程度の前庭覚刺激が笑顔を引き出した結果と判断できた。これらの覚醒と情動に関する前庭覚機能は、低反応性の特徴と一致している。

前庭覚刺激の低反応性に対して主に乗馬による速足を中心に実施した。馬の選択は、騎乗者への上下左右回旋などの動きが大きい馬を馬担当が選択した。また感覚刺激は強い刺激でも、持続的に提示することにより閾値が高くなり、いわゆる「慣れ」が生じてしまい、

刺激としては感じにくくなってしまふことやプログラムとして単調にならないようにするために、林の中の昇り下りのあるコースや上下の繰り返し短い距離にあるコースなどを利用した。

ホースセラピーの実施時には常に笑顔の様子を観察し、必要な刺激が受容できているのかを観察した。

結果としては、小学校での授業中の多動性は軽減したものの、両親から見た日常的な多動性に関しての変化はなかった。しかし、その他の変化として、小学校では、今まで積極的に取り組もうとすることがなかったが、以前よりはいろいろなことに取り組むようになったとのことであった。

両親の思いの中には「自信がないのでやろうとしない」との見方があり、「少し自信が持てるようになったのではないか」との話を聞くことができた。

<ケース3：自閉スペクトラム症>

・日常的にこだわり行動が観察される。

・外遊びは好きなほうではない。

前庭刺激に対する反応性はやや過敏と思われた。回転後眼振検査では、回中に姿勢保持が困難となり、回転停止後につばを飲み込むような様子が観察された。嘔気の訴えがあった。

・コミュニケーションの困難さ。

会話をするが一方向的であり、やり取りになっても、質問とその答えがずれていると思われることがある。

いくつかある目的の中から、今回は以下を取り上げた。

#1：運動を含めて外遊びを楽しめるようになる

感覚刺激は、敏感な状況、感じにくい状況のどちらの場合にも、日常の適応行動に問題を抱えることがある。本ケースにおけるコミュニケーション上の問題も、名詞に関しては、よく覚えていたり、自分から話す言葉には年齢にそぐわない大人びた言葉などを用いることがある。しかし、体育の授業などでは、教師からの指示が理解できていないようであり、行動は常に遅く周囲の動きを見て行動している。動詞が使えない。

コミュニケーションとして用いることの可能な言葉の習得には、実体験を通して種々の感覚刺激を受容し言葉とつなげられることが重要である。

前庭覚刺激は、重力や自分自身が空間の中で動くことで得ることの可能な感覚刺激である。言葉とのつな

がりでは、自分自身を中心に置いた場所を表す言葉や位置、方向、動き、物と物との位置関係、人同士の位置関係などは前庭機能との関連が強い。本ケースの問題も前庭覚機能の問題と関係していると思われた。

前庭覚刺激には過敏な反応性、いわゆる過反応性を有していることから、自分から動かない遊びを好みそれが運動発達や姿勢保持の困難さにもつながっていくことが予測される。

実際のプログラムでは、両親からの聞き取りにより、前庭覚刺激に対する過反応性が初めから予測できていたことから、すぐに騎乗するのではなく、他児が騎乗している様子を見る。いろいろな物理的な環境に実際に触れる。それに説明を加えた。不安を軽減する方法に触覚刺激と圧迫刺激の提供が有効であることから、これらの場面では父親に抱いてもらいながら実施した。

馬の選択は、従順であり騎乗者への動きの影響が比較的少ない馬を馬担当者が選択した。その後、騎乗したが、騎乗の際にはサイドウォーカーがケースの大腿部を上方から軽度の圧迫を行うことも実施した。これは不安を軽減するための方法である。

曳き馬での実施だが、発進、停止、速く歩く、ゆっくり歩く、左右へ曲がる、坂を上る、下るなどにより受容している前庭覚刺激に合わせてサイドウォーカーおよびインストラクターから言葉かけを行うことはコミュニケーション能力に働きかけるうえで重要である。前庭覚刺激と言葉をつなげる絶好の機会となる。具体的な言葉は、発進を例に挙げると「すすめ」「出発」など、お子さんとスタッフ間で決めておけば良いので、この言葉でなければならないというものではない。

結果、はじめは不安そうにしていたが、最終的には笑顔を観察することができた。初回はその段階で終了とした。

後日談ではあるが、帰宅後その日あったことをとてもよく話していたとのことである。

こんなエピソードもある。

母親が不安そうにしている子どもに向かって「家でお話した時には、自分から馬に乗るんだーって言ってたでしょ、お約束したじゃない」と諭す場面があった。発達障害のお子さんと接しているところのような親子の会話には度々遭遇する。子どもは、話では状況がよくつかめないことから、家では、返事をするが、実際の場面では躊躇してしまう。親の子どもに対する対

応などにも、このような場面を通して説明、指導することも重要である。

8. まとめ

自閉スペクトラム症の日常生活上の困り感について、聴覚過敏、触覚過敏、視覚過敏など、感覚機能との関係について考察している論文が散見される。

松下は、自閉スペクトラム症患者の中には感覚刺激に対する特異性によって慢性ストレスを生じ、精神症状をも起こしうることがある、としている。『DSM-5』(Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, 5th ed.)では「感覚刺激過敏性・鈍感性および、環境への感覚的異常な興味」の項目が診断基準に追加されたことにも触れている⁸⁾。

松田らは、自閉スペクトラム症児者の多くは感覚過敏・鈍麻の特性を有するために、生活適応上の困難に直面しがちであるとして、保護者を対象として日本版感覚プロフィール短縮版と共に感覚過敏・鈍麻への対応方法についてアンケート調査を実施し、保護者のかかわりが当事者にとって不快な感覚刺激の軽減、回避に繋がっていることが示唆された⁹⁾と述べている。

脳性麻痺には痙直型やアテトーゼ型などがあり、障害のタイプも種々ある。障害の状況は対象児・者の様子から比較的わかりやすい。診断名や障害名のみでは、ホースセラピーの方法を決定することは困難であり、むしろ個々の障害の状況に応じて方法も変更していくことが必要である。

発達障害においては、診断名から支援方法を定めることはできない。個々の心身機能の把握とそれに対する具体的な支援方法の立案が重要である。「対人関係の障害」、「コミュニケーションの障害」、「パターン化した興味や活動」等、具体的な原因は異なることは多々ある。可能な限り、対象児・者ごとの状態の把握と具体的な支援方法の立案が重要といえる。

目的が「笑顔になろう」の場合にも、それぞれの障害の具体的な状況に適した方法でのホースセラピーで可能になる。対象が障害を持っていることから一般論では語るができないことを知っておくことが重要である。

可能であれば、馬の専門家と人の専門家の協業によるホースセラピーの実施が良いと思われる。しかし、この条件が必ずしも現状では整っているわけではない。

それぞれの立場にある者が両者の必要性を認識し、協業が不可能な場合には、可能な限り両方の知識技術の理解と修得が行われることが重要である。前述した通り PATH での基準も AHA の Hippotherapist 講習会でも、馬について人についてどちらの内容にも比重を置いている。日本における種々の講習会もこの両者に関する知識技術について行われているが、より一層の充実が必要ではないかと考えている。私たちが行うホースセラピーは、対象児・者に対して実施されるものであることを考えると、日々の研鑽は私たちにとって必須であることは言うまでもない。

最後になるが、作業療法士としての私自身が常に心がけていることは、対象児・者が楽しいと感じる作業こそが効果的であること。それに加えて、提供する私自身が楽しいかわりができたと思える作業こそが対象児・者にとって、もっとも効果的な作業である。このような作業を提供することこそが作業療法士の私には課せられている、と認識することである。

文献

- 1) 河村奈美子, 他. 2015. 乗馬プログラムにおける発達障がいをもつ子どもの行動の変化. 大分大学高等教育開発センター紀要 7: 45-52.
- 2) 倉恒弘彦, 他. 2011. 馬介在療法の科学的効果—関西福祉科学大学での取り組みを中心に—畜産の研究 65: 15-22, 2011.
- 3) Learn About Therapeutic Riding. Professional Association of Therapeutic Horsemanship International®. <https://pathintl.org/resources-education/resources/eaat/27-resources/general/198-learn-about-therapeutic-riding> (閲覧日 2020年6月15日).
- 4) Hippotherapy vs. Therapeutic Riding. American Hippotherapy Association. <https://www.windrushfarm.org/downloads/american.pdf> (閲覧日 2020年6月15日).
- 5) PATH Intl. Registered Riding Instructor Criteria “Professional Association of Therapeutic Horsemanship International®”. <https://www.pathintl.org/images/pdf/resources/certifications/2018-registered-instructor-criteria.pdf> (閲覧日 2020年6月15日).
- 6) 石井孝弘. 2009. 乗馬療法における対象者および馬に関する評価表の検討—効果的な乗馬療法を実践するため—. J Anima Assisted Edu Ther 1: 9-15.
- 7) 石井孝弘, 他. 2017. 日本国内の障害者乗馬に取り組む乗馬施設の現状と今後の課題. 帝京科学大学紀要, 13: 87-96.
- 8) 松下賢治. 2019. 自閉症スペクトラムの視覚特性に対する眼科医の役割. 神経眼科 36: 169-177.
- 9) 松田恵子, 他. 2019. 自閉スペクトラム症児者における感覚過敏・鈍麻の実態 (2). 心理・教育・福祉研究, 18: 57-65.

馬事往来

北の大地の草ばん馬

小久保友香（写真：小久保巖義）



小久保友香（こくぼ ゆか）

1974年札幌市生まれ、帯広在住。北海道新聞 HotMedia 所属。北海道新聞十勝版ではばんえい競馬やグルメ、イベント等の取材をしながら競馬媒体のライターとしても執筆。草ばん馬を紹介する Facebook、Twitter「ばん馬大会情報」を管理。



小久保巖義（こくぼ みちよし）

1975年茨城県生まれ、帯広在住。ばんえいやホッカイドウ競馬、牧場風景などを撮影するフリーカメラマン。夫婦で競馬場のほか草ばん馬や働く馬、馬のいる風景を追いかけている。

はじめに

そりを引く「ばんえい競馬」のルーツともいわれる「草ばん馬」。北海道開拓時代、農耕や林業で活躍した馬たちの力比べとして「おらが馬」の強さを競い合ったことが始まりだ。現在でも、馬文化を残そうと尽力する愛好家のおかげで北海道と東北で続いている。10数カ所で行われている北海道の草ばん馬の現状について紹介する。

1. 概要

1) コース

スタートからゴールまで200メートル、障害は二つではばんえい競馬とほぼ同じ。ただ帯広競馬場のように直線ではなく「U字型」であることが多い。第1障害を越えて右、または左回りに180度カーブし、第2障害を越えてゴール。U字の利点は、ゴール後スタート地点までそりを運ぶ必要がない、広い場所を取らない、など。



北海道の馬文化を伝える迫力あるばん馬レース



道東・本別町のU字コースは右回り。慎重にコースを周る。

競馬場ではレース後そりをトロッコに乗せて運ぶ。草ばん場の直線コースの会場はというと、道南では、森町が農機具のエンジンと油圧モーターを使った動力で、北斗市はトラクターを動力にしてトロッコを動かす。道東の釧路、別海、摩周湖はトラクターが数台待機して、そりを数台運ぶ。ゲートは、廃止になった競馬場や草ばん馬会場で使っていたもの。杭が打たれただけのところもある。

2) 馬

ばん馬（ばんえい競馬に出走する日本輓系種などの大型馬をここではばん馬とする）とポニー。

①ばん馬

300～900 kg ほどのそりを引く。牧場からは、運動を兼ねた種馬、練習やお披露目の場となる1歳馬が来る。1歳の活躍馬は秋に帯広競馬場で行われるエキシビジョンレース「祭典ばんば1歳馬決勝大会」に出走する。

現役競走馬も出走でき、大会当日は競馬場から馬運車が乗り付ける。馬は出走7日前までに競馬場へ入厩する必要があるが、草ばん馬に参加する場合は特例として5日前まで認めている。通常日曜に行われる大会に出ても、その週の土曜日のレースには間に合う。

②ポニー

ポニーといえは体高 147 cm 以下だが、草ばん馬の上



道南の北斗市では、そりに乗せたトロッコをトラクターがうまく動かす



調教されたポニーは筋肉質に見え、目つきも鋭く見える。

限は 120 cm までがほとんど。体高や年齢によってクラスを分け、10~250 kg ほどの小さなそりを引く。

旭川の大会を主催する大高朝幸さんは「40年ほど前は草ばん馬の余興だった」という。今では1日の半分以上がポニーレースだったり、ポニー色の大会も増えたりするほど盛んになり、昨年は全道で16あるうち5つがポニーのみだった。

ポニーは飼育しやすく、馬運車やそりなどの道具が全て小さくて済む利点がある。ばん馬からポニーに移行した高齢者もいるが、若手の参加者も多い。体高を書いたカードを作るなどシステムを構築し、スムーズな運営に一役買っている。

3) レース

ばん馬とポニーが合わせて10~30レース。午前9時または10時から昼休みを挟み、午後2, 3時頃まで。当日の出走申し込みによってレース数も変わる。出走馬は1, 2走し締めはばん馬による「重量戦」で、一番重いそりの力比で盛り上がる。10枠用意している会

場もあるが、フルゲートになることはほとんどない。

上位者には賞金のほかテレビや洗濯機が当たることも。競馬の賞金が低かったころは「こちらの方が儲かる」という馬主もいた。地元の著名人が乗るエキシビションレースもある。

<補足1 騎乗競馬>

道東の鹿追と別海では騎乗競馬も行われている。ともに一周約1,000 mのコースで繋駕、速歩、駈歩競走が行われる。釧根地区の中標津や浜中、十勝地区に愛好者がおり、道具は過去使っていたものを直したり、ニュージーランドやフランスから輸入したりしている。馬は Trotter などの中間種や北海道和種馬。駈歩などは関東から乗馬クラブの会員が大会めがけて来ることもある。

<補足2 東北の馬力大会>

東北は「馬力大会」と呼んでおり青森で盛ん。そりの上に人は乗らない。無口につけた引き手を引く「口持ち」と、後ろから追う「後追い」で馬に荷物を引かせる。そのため馬具も微妙に違う。道南とは交流も盛



ポニーばん馬の特徴はスピード感。スタートの速さに驚く。

んで「東北方式」と「北海道方式」の馬によるレースが見られることもある。シーズン時は地元で活躍し、冬のみ競馬場で走らせる馬もいる。

4) 参加者

お盆などに、道内各地で行われていた時は近くで大会があれば参加する形だった。数が減った今は、大会のたびに馬、馬主、騎手、馬好き、手伝いの1チームで道内を周る。道南と道東の参加者は8時間ほどかけてお互いを行き来。「うちに来てくれたから行かなくては」という義理堅い世界でもある。ある馬主は「馬を調教して勝負しに行くのが楽しい」と話す。

騎手はオーナーや馬乗り名人。女性や中学生もいるがポニーが多い。2歳でそりに乗る子もいて会場が笑いに包まれる。騎乗予定のある人は体重を計り、騎手重量に足りない分は砂袋をそりに乗せる。体重オーバーはハンディとなる。

競馬の馬主も多いため、調教師の姿もよく目にする。元騎手の調教師による懐かしい騎乗姿が見られること

も。今は少ないが、平日や休催時期の大会では現役騎手の姿も見かけた。

見た目より若い高齢者が多く年齢を聞いて驚くことも。ポニーを中心に若者も増えている。

5) 主催者

馬好きが実行委員会や愛馬会を作り主催する。町の祭りと合わせるところもあるが数は減った。

2006年にばんえい競馬が存続の危機となり、岩見沢、旭川、北見が撤退。馬の生産頭数も減り始め、大会も廃止が相次いだ。それでも有志や個人が存続、新設して続けている。十勝・清水町では「ばんえいのある十勝に草ばん馬がないのは」と高村壽さんが自分の牧場内にコースを作った。道東の摩周湖や道央のむかわ町穂別は、それまでの主催者が開催を断念した後に有志が会を立ち上げた。摩周湖近くの生産者長谷川義晃さんは「草ばん馬が好きだから」と理由を明快に語る。北斗の田山運輸や江別のアースドリーム角山農場などは馬主が「馬文化を守りたい」と開催する。

市町村が後援，ばんえい競馬関係者や近くの商店街などが協賛し，大会を支える。

2. 草ばん馬の風景

ただっ広い草場が，数日でばん馬会場に様変わりする。当日は朝早くからコースのそばに馬運車が並び，つながれた馬のいななきが聞こえる。出走登録，ポニーの体高と騎手の体重測定を終えると1レース。主催者や町長の挨拶も待ちきれず，馬はゲートに入っている。「早くすれ！」との声に笑いが起きる。

地域の運動会のようなのだが，「勝ちたい」だけの大人が本気で遊ぶ。再三流れる「コースの中に入らないでください」というアナウンスも無視して，馬の横から真剣な表情で馬にげきを飛ばす。昔はよく喧嘩も見られ「人情もあった」と長谷川さん。

昼休みは馬運車の内外が焼き肉会場となる。「食え！」歩いていると声がかかる。馬好きは皆「このた

めに仕事をしている」という。私は懐っこい馬好きたちが集まる牧歌的な雰囲気の中になっている。レース後には北海道の祭りらしく「もちまき」が行われる場所もある。

大会には，出走受付をする人，出馬，賞状を書く人など多くの人手がかかっている。出走馬にそりや馬具をつける準備は参加者が自ら手伝う。

重要なサポート役が実況アナウンサー迫田栄重（さくたさかえ）さん。道東で司会業を行う迫田さんは，わかりやすく馬の動きを伝え，騎手の名前や特徴を呼び（時にはあだ名で），笑わせる。知らないうちに出走馬が増えたり，騎手が変わったり，は日常茶飯事。マイクを持って走り回り，人馬を確認したり，トラブルをなだめたりと大活躍。今では大会の半分以上が迫田さんの実況だ。馬のことは知らないが「人馬一体というけど，“人人一体”のつながりがいい」と人間模様を愛する。



老若男女が集まるレース前。参加者は自発的に知り合いの馬が走る準備を手伝う。

3. 課題

「昔はあちこちでばん馬やっていたんだよ」と聞く。昭和から続く伝統ある草ばん馬は、運営の高齢化、後継者不足や出走馬の減少、資金難により次々と廃止に追い込まれてきた。2013年には道内最古といわれる「東士幌輓曳競馬大会」が100回をもって終止符を打った。歴史ある大会が次々と消えている。

現在行われている大会は、全て馬好きたちの情熱と努力によって残っている。そのため、中心人物の急逝によって休止した大会もいくつかある。生産者は「草ばん馬がなくなると生産馬が減り、競馬場に行く馬も少なくなる」と話す。ばんえい競馬の将来ともつながる。

宣伝不足の声も聞く。筆者はインターネット上で予定を紹介しているが、観戦無料で参加者が楽しむだけのイベントを紹介すべきか躊躇する気持ちもある。しかし若手の一人、本別町の樋口祐馬さんから「小さなポニーでも始めるにはハードルが高い」といった課題を聞くと、観戦者が増えることでハードルを下げられればと思う。

個人的には、歴史が残っていないことに危惧している。歴史を調査している人に「市町村史には草ばん馬に関する記述をほとんど見たことがない」と聞いた。昔を知る人たちに語り継いでもらうしかなく、今後、可能な限り調査していければと考えている。

今回も多くの関係者に話を聞いた。「思いは同じ」と全員の名前を紹介できなかったがこの場を借りて感謝したい。

共和町愛馬会会長で、2015年に亡くなられた田中猪之助さんは「馬は北海道開拓の立役者。馬文化をなくしてはならない」と語っていた。開拓時代と変わらない余暇の風景が永く続いてほしい。

<参考 2019年に行われた北海道内の草ばん馬>

- 5月12日 森町桜まつりばんば競技大会（道南）
- 5月19日 厚沢部町ばんば競技大会（道南）
- 6月2日 十勝清水町旭山ばん馬競技大会（道東）
- 6月16日 ポニーばんば大会（道北・旭川市大高牧場）
- 6月16日 アースドリーム角山農場 江別ばん馬大会（道央）

- 7月7日 渡島家畜商商業協同組合 北斗大野支部 輓馬競技大会（道南・北斗市）
- 7月7日 ハマナスポニーばんば大会（道北・紋別市）
- 7月13日 鹿追町競ばん馬競技大会（道東）
- 7月28日 穂別ポニー輓馬大会（道央・むかわ町）
- 8月4日 サロベツポニーばん馬大会（道北・豊富町）
- 8月25日 釧路輓馬大会（道東）
- 9月1日 本別きらめきタウンフェスティバル ポニーばん馬レース（道東）
- 9月8日 富良野ホースフェスティバル ばんば大会（道北・富良野市）
- 9月14日、15日 別海町馬事競技大会（道東 1日目騎乗、2日目ばん馬）
- 9月22日 摩周湖ばん馬大会（道東・弟子屈町）
- 10月13日 田山産業運輸ばん馬競技大会（道南・北斗市）

道央・岩内町の「共和かかし祭ばん馬競技大会」は2019年休止し、次開催で盛大に行って最後とする予定。2018年から休止していた美瑛町「ファームズ千代田ポニーばん馬大会」は2020年に復活する予定だったがコロナ禍で中止。

補足：2020年は新型コロナウイルス感染症防止の影響でほとんどの大会が中止になった。7月から防止策を徹底したうえで計6件開催された。

ばん馬は9月と10月に北斗で行われた2件。競馬場からは、馬を連れてくる厩務員や調教師が外出できないため草ばん馬への参加はなかった。

<2020年に行われた北海道内の草ばん馬（かっこ内は当初の予定）>

- 7月26日 穂別ポニー輓馬大会（5月31日）
- 8月9日 ハマナスポニーばんば大会（7月5日）
- 9月13日 富良野ホースフェスティバル ばんば大会（6月14日）
- 9月27日 渡島家畜商商業協同組合 北斗大野支部 輓馬競技大会（7月）
- 10月4日 旭川市大高牧場 ポニーばんば大会（6月は中止、その後追加開催）
- 10月11日 田山産業運輸ばん馬競技大会

書籍紹介

『第5コーナー 競馬トリビア集』

著者：有吉正徳

発行所：株式会社 三賢社

定価：980円（税別）新書版 253頁

競馬が行われる“馬場”は陸上競技場のようなトラックの形状となっている。よってコーナーは4つのはず。ではタイトルにある「第5コーナー」とはいったいどういうことなのか？

競馬トリビア集とあるので、本書を紹介する前に馬場についてのトリビアをひとくさり。

現在行われている近代競馬はそもそも馬産地の牧場主たちが、より強くて速い馬を生産するため、互いの自慢馬を持ち寄って勝負を競い合ったことから始まっている。当時の馬場はそれら牧場群の中からやや平坦な場所が選ばれ、木立や丘が存在する自然の地形を生かした中で行われ、言うなればクロスカントリーのようなもの。コーナーも一つか二つ。

イギリスのニューマーケット競馬場の1マイル（約1.6 km）以上の直線馬場や、1周2,000 mとはいえホームストレッチ以外固定柵もなく、外周も簡単な柵で周囲の自然な地形なりに続いている馬場が現在も見られるのは、競馬発祥当時の馬場の名残り。

其れがいつしか馬券の伴う競馬となり、競馬と直接関係ない第三者も参加しやすいように馬場もその形が整えられ、現在見られるような形状となって、4つのコーナーが存在するようになった。

この4つのコーナーで繰り広げられる競馬には、生産者、馬主、調教師など厩舎関係者と競馬ファンら様々な方の数多くの想いと、人知れずの物語が秘められている。そしてレース結果は記録として残され、次の生産・競馬に引き継がれ活用されている。

馬場で争われるレースは衆人環視が見守る表の出来事としたら、それにまつわる想いや記録は裏。そうです、競馬はゴール板を過ぎても続いているのです。それが第5コーナーでは。

著者はこの本のタイトルについてまえがきでこう言っている。

「あまり知られていないことを見つけたり、達成された記録を深掘したりして、原稿にまとめた。競馬場に〈第5コーナー〉は存在しない。まだ誰も触れたことのないエピソードや記録を残すことにチャレンジしてみよう」

さらに著者はこれを書くに当たって、「馬券の伴う競馬は、どうしても勝ち馬予想に比重が置かれがち。予習ばかりして復習がおろそかになる。終わったレースから何を学び、今後に結びつけるか」という思いを主題としている。

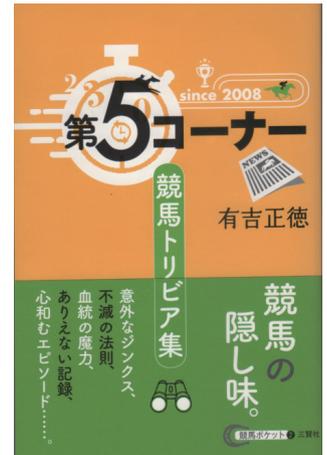
では本著を読めば次の馬券検討、勝ち馬予想に役立つヒントがあるのか。それは何とも言い難いが、競馬をこれまでとは別の視点で見るという楽しみと知識が得られることは請け負うことはできる。

そもそも本書ができた経緯はこうだ。1994年日本軽種馬協会（JBBA）はそれまでの新聞型の会報から冊子型の機関誌に衣替し、『JBBA NEWS』通称JNとして刊行した。会報時代にはできなかった識者による随筆を冊子型となったことで、JNに取り入れることにした。それらには、生産地と競馬に造詣の深い作家による、ファンの目線で産地に対しての応援メッセージ、元教師による主産地北海道外の東北の産地から往年の馬づくりの話、そして今の姿を伝えるなど。当初は産地向きの題材が主であったことから、競馬そのものに係わる読み物も加えることに。生産者もファンも気づかない競馬の裏側にある部分・物語を著者をお願いした。

2008年4月号の記念すべき第1話は「“買い目”は俺が決めるぜ」。コンピューターが打ち出す乱数表を基に勝ちゲームを選び購入するサッカーくじの話。競馬は勝ち馬を予想するその行為が面白い。ファンの最大の喜びでそれ奪うサッカーくじ。著者はそれを〈許せない〉と宣言？している。

そんな競馬好きの著者によって、自然の立地を生かしていた馬場時代は限られた人のものであった競馬が、4つのコーナーを持つ馬場になって大衆娯楽となり幾多の競馬物語・記録を誕生させた。そして競馬には、第5コーナーという知識の泉があることをこの一冊が教えてくれる。

（松尾圭二）



Journal of Equine Science

Vol. 31, No. 4, December 2020

和文要約

原著

サラブレッドにおける低酸素および常酸素、高酸素環境下における高強度運動時の呼吸循環機能——大村 一¹、向井和隆¹、松井 朗¹、高橋敏之¹、James H. JONES² (¹日本中央競馬会 競走馬総合研究所, ²Department of Surgical and Radiological Sciences, School of Veterinary Medicine, University of California, Davis) …………… 67

相対的、または絶対的運動強度が同じ時、異なる吸入酸素濃度下における超最大運動時の呼吸循環機能の反応は異なる可能性がある。本研究は、低酸素下・常酸素下および高酸素下における超最大運動時のサラブレッドの呼吸循環機能について、その特徴を明らかにすることを目的とした。5頭のよくトレーニングされたサラブレッドを用いて110秒間を目標としたオールアウト走を常酸素下 (NO群; 酸素=21%), 低酸素下 (LO群; 酸素=15%) で行った。さらに2走させ、1走はNO群と同じスピードで高酸素下 (HO_{NO}群; 酸素=28.8%), もう1走はLO群と同じスピードで常酸素下 (NO_{LO}群; 酸素=21%) で行った。以上の4走は異なる日に行い、呼吸循環機能について測定を行った。データは分散分析により有意差を検定した。走行時間とスピードはそれぞれLO群で103 ± 14秒, 12.6 ± 0.5 m/sec, NO群で112 ± 17秒, 14.0 ± 0.5 m/secであった。最大酸素摂取量はLO群がNO群より有意に低く (120 vs. 165 ml/kg/min), 動脈血酸素分圧も同様にLO群が低かった (45 vs. 66 Torr)。心拍数、一回拍出量には差がなかった。HO_{NO}群の酸素摂取量 (194 ml/kg/min) はNO群のそれよりも有意に高かった。同じ相対強度における低酸素下の超最大運動は常酸素下でのそれより著しい低酸素血症と最大酸素摂取量の低下をもたらすことが明らかとなった。また、同じ絶対強度の超最大運動時における高酸素下の酸素摂取量は、常酸素下の最大酸素摂取量よりも高いことが明らかとなった。

馬スポーツにおける遺伝子ドーピングコントロールのための馬毛根から抽出したゲノムDNAを用いた全ゲノムリシーケンス——戸崎晃明¹、大沼 葵¹、菊地美緒¹、石毛太郎¹、梶 祐永¹、廣田桂一¹、Natasha A. HAMILTON²、草野寛一³、永田俊一¹ (¹競走馬理化学研究所遺伝子分析部, ²レーシングオーストラリア馬遺伝学研究所, ³日本中央競馬会馬事部) …………… 75

遺伝子ドーピングは、競馬および馬術競技といった馬スポーツで禁止されている。以前の研究において、血液から抽出したゲノムDNAを使用した全ゲノムリシーケンス (WGR) に基づき、標的非特異的にトランスジーン (導入遺伝子) およびゲノム編集された部位を検出する方法を開発した。毛根採取は血液採取よりも侵襲性が低く、長期間の保管も比較的容易であることから、本研究では、毛根からのDNA抽出物を用いたWGR法の開発を目的とした。室温で複数年間にわたって保管された毛根から抽出したゲノムDNAは、すべてのサンプルで分解されていたが、冷蔵 (4-8°C) で複数年間にわたって保管された毛根から抽出されたゲノムDNAは高品質を維持していた。そのため、磁性シリカビーズ抽出によって高分子のゲノムDNAを毛根から抽出することで、WGRを可能にした。血液から抽出したゲノムDNAを使用したWGRと比較しても、同品質の一塩基多型 (SNP) および挿入/欠失配列 (INDEL) を検出できた。これらの結果は、毛根を冷蔵保管することで、ゲノムDNAの分解は抑制され、WGRに基づく遺伝子ドーピング検査を可能にすることを示した。

繁殖に供された個体が死んだ場合であっても、保管した毛根を使うことで検査が可能であることから、本研究結果は、遺伝子ドーピングの抑止力になると考えられた。我々の知る限り、本報告は長期保存したウマの毛根からWGRを実施した最初の研究である。

国内現役サラブレッド競走馬の糞便由来大腸菌の薬剤耐性分析と系統発生群別——佐藤 航¹, Eddy SUKMAWINATA², 上村涼子^{1,3}, 神田卓弥², 草野寛一⁴, 上林義範⁴, 佐藤 岳⁵, 石川裕博⁵, 遠矢良平², 末吉益雄^{1,2} (¹宮崎大学農学部獣医学科, ²宮崎大学大学院医学獣医学総合研究科, ³宮崎大学産業動物防疫リサーチセンター, ⁴日本中央競馬会美浦トレーニング・センター, ⁵日本中央競馬会栗東トレーニング・センター) …… 85

本研究では、国内のサラブレッド競走馬糞便由来大腸菌の薬剤耐性調査を実施した。2017年3月から2018年8月に、日本中央競馬会の2箇所のトレーニングセンターでサラブレッド競走馬計212頭の糞便を採取し、選択培地を用いて大腸菌を分離した。分離大腸菌417株について、10薬剤に対する薬剤感受性試験を微量液体希釈法で実施し、また、系統発生群の分類も行った。その結果、最も耐性率の高い薬剤はストレプトマイシン(30.9%; 129/417)であり、続いてアンピシリン(19.4%; 81/417), チルミコシン(15.8%; 66/417), テトラサイクリン(8.4%; 35/417), クロラムフェニコール(2.6%; 11/417), カナマイシン(1.2%; 5/417), ナリジクス酸(0.5%; 2/417), セファゾリン(0.2%; 1/417), コリスチン(0.2%; 1/417)およびゲンタマイシン(0%)の順であった。分離株の7.9%(33/417)が多剤耐性を示した。系統発生群別でB2群に属する大腸菌のアンピシリン, ストレプトマイシン, カナマイシンおよびクロラムフェニコールに対する耐性率ならびに多剤耐性の割合は、他の系統発生群よりも有意に高かった。本研究では、国内の競走馬由来大腸菌の薬剤耐性状況を明らかにしたが、薬剤耐性の制御には、今後も継続的な調査が必要である。

短 報

解剖学的観察および超音波検査により明らかにされた与那国馬の第2から第7頸椎に付着する項韌帯項板の稀有な所見——Sharon MAY-DAVIS¹, 美濃輪史子², Wendy Y. BROWN¹ (¹University of New England, Canine and Equine Research Group, ²株式会社ミノワホースクリニック) …… 93

与那国馬は日本の最西端の島に隔離された稀有な一品種のポニーで、例えば、項韌帯項板(NLL)の第2頸椎から第7頸椎への付着状況について、大部分の家畜馬(*Equus caballus*)では失われている正常な形態学的特徴を良く維持しているかもしれない。最近の研究では、大部分の現代の家畜馬(*Equus caballus*)ではNLLがもはや第6頸椎と第7頸椎には付着していない

ことが明らかにされている。本研究では、3頭の与那国馬のNLLの付着状況について、2頭で死亡馬の解剖によるその場(*in situ*)観察を、1頭で生馬の超音波診断装置による(*in vivo*)検査を実施した。本研究の目的は、与那国馬のNLLの頸椎への付着状況について、これまでに著者が行ってきたウマ科動物の形態像と比較検証することである。調査の結果、与那国馬ではNLLが第2頸椎から第7頸椎に付着していることを*in situ*観察により2/2頭で、*in vivo*検査により1/1頭で明らかにすることができた。

双胎妊娠サラブレッド繁殖牝馬における流産と子宮脱：臨床所見と検査所見および治療のアプローチ——Mohammed ALAMAARY¹, Ahmad ALI^{2,3} (¹Horse Clinic, Ministry of Environment, Water and Agriculture, ²Department of Veterinary Medicine, College of Agriculture and Veterinary Medicine, Qassim University, ³Department of Theriogenology, Faculty of Veterinary Medicine, Assiut University) …… 95

サラブレッド繁殖牝馬における妊娠8か月目の双胎子流産後に発生した子宮脱の1症例の報告。脱出した子宮は出血し充血していたが、損傷はなく、胎盤はまだ子宮内膜に固着していた。血液検査の結果、リンパ球数の減少が見られたが、エストロゲンおよびプロゲステロン濃度は分娩時の繁殖牝馬と比較しても正常であった。子宮頸管と陰核のスワブによる細菌学的検査の結果、緑膿菌が分離された。脱出した子宮は、温生理食塩水による洗浄後、停滞した胎盤を注意深く除去し、反転させる前に抗生物質クリームを全体に塗布し整復した。陰部の上2/3を一時的に縫合し、抗生剤と抗炎症剤を5日間全身投与した。24時間後に抜糸し、温生理食塩水により子宮洗浄を3日間実施した。また子宮内のクリアランスを助長するため、20 IUのオキシトシンを1日2回、3日間投与した。抗生剤を子宮内にも局所投与した。これらの処置後、一切の健康障害を示さなかった。流産の9日後、さらにその10日後には発情期に入った。結論として、双胎妊娠は危機的な状態であり、妊娠初期および後期は適切に管理されるべきである。また子宮脱は牝馬の繁殖能力を維持するために熟練した方法で治療されるべきであり、カルシウム欠乏症は子宮脱を起こし易くする可能性がある。

日本の平地・障害競走における落馬と騎手の損傷に関する疫学調査 (2003~2017年)——溝部文彬¹, 高橋佑治², 草野寛一³ (¹日本中央競馬会美浦トレーニング・センター競走馬診療所, ²日本中央競馬会競走馬総合研究所, ³日本中央競馬会馬事部) …………… 101

競走中の落馬は、騎手の重大な損傷に繋がる危険がある。競馬主催者として有効な安全対策を講ずるうえでは、騎手の落馬や損傷の発生状況を把握し、その発生に関連する要因を分析することが必要となる。そこで、本研究では、過去15年間の平地・障害競走を対象とし、落馬および損傷の発生率、発生原因および発生場所等の疫学調査を実施した。平地競走(出走馬:715,210頭)においては、992件(1.4/1,000)の落馬と399件(0.6/1,000)の損傷が記録された。障害競走(出走馬:25,183頭)においては、1,117件(44.4/1,000)の落馬と458件(18.1/1,000)の損傷が記録された。本研究から、諸外国と比較し、落馬および損傷の発生率は概ね同等と考えられた。また、平地・障害競走ともに落馬のおよそ4割で損傷が記録された。平地競走においては、コーナーで発生する落馬の56.8%が損傷に繋がった。落馬の発生原因としては、馬の躓きが最も多かったが、騎手の損傷を伴う割合については、他馬との接触あるいは馬致死性疾病の発生を原因とした落馬において高かった。次に、障害競走においては、落馬および損傷のほとんどが障害付近で発生していた。また、ハードル障害での落馬の半数以上で損傷が記録された。今後は、本疫学調査の結果をもとに落馬に関連するリスク要因を分析し、有効な安全対策を講じていきたい。

2回遠心法で高濃度ウマ多血小板血漿を作製する最適な遠心条件の検討——福田健太郎¹, 桑野睦敏¹, 黒田泰輔¹, 田村周久¹, 三田宇宙¹, 岡田裕二², 笠嶋快周¹ (¹日本中央競馬会競走馬総合研究所, ²日本中央競馬会美浦トレーニング・センター) …………… 105

近年、多血小板血漿 (PRP) 療法がウマ臨床において普及している。本研究では、白血球数が異なる2種類のPRP (多白血球PRP (L-PRP) および乏白血球PRP (P-PRP)) について、最大限の血小板数が得られるような2回遠心法の最適な遠心条件について検討を行った。採取された全血に対して4条件の相対遠心力 (160, 400, 900, および2,000 g) で初回の遠心を行った後、160 および400 g で遠心を行ったサンプルに対してはさらに2回目の遠心を行った。各遠心後にL-およびP-PRPをそれぞれ作製し、各PRP中の血球数および2回遠心後のPRP中成長因子濃度を測定して比較を行った。この結果、160×900, 160×2,000, および400×2,000 gの条件で作製されたPRPでは、PRPの種類に関わらず、他の条件に比べて高い血小板数が得られた。P-PRPでは、L-PRPに比べて著しく低い赤血球および白血球数を示し、特に400×2,000 gでは白血球数が全血以下の値まで低下していた。またこれらの3条件により作製されたPRPには等しく高濃度の成長因子が含まれていた。これらのことから、L-PRPを作製する場合は160×900, 160×2,000, あるいは400×2,000 g, P-PRPを作製する場合は400×2,000 gの遠心条件が最適と考えられた。

臨床委員会 DVD 販売のお知らせ

日本ウマ科学会臨床委員会では、過去に開催された臨床委員会主催の招待講演ならびに実習のDVDを販売しています。

<お申し込み方法>

以下の申込用紙をご利用いただくか、メールで事務局までお申し込みください。

<価格および代金のお支払い方法>

価格は1セット **3,000円** (税込) です。

お申し込み後、折り返し合計代金をご連絡いたしますので、ご確認の上、下記口座まで代金をお振込みください。納金確認後、宅配便にてお送りいたします。なお、お手数ですが送料は受取人様払いでお願いいたします。

郵便振替口座 記号番号：00130-3-539393

または

ゆうちょ銀行(9900) 〇一九(ゼロイチキュウ)店 当座預金口座 539393

口座名：日本ウマ科学会(ニホンウマカカクカイ)

----- キリトリセン -----

申込用紙

ご希望のDVDと枚数	(1) 2009年(第22回学術集会) Dr. Brooks	眼科	() セット	
	(2) 2010年(第23回学術集会) Dr. Richardson	整形外科	() セット	
	(3) 2011年(第24回学術集会) Dr. LeBlanc	繁殖	() セット	
	(4) 2012年(第25回学術集会) Dr. Dyson	跛行診断	() セット	
	(5) 2013年(第26回学術集会) Dr. White	急性腹症	() セット	
	(6) 2014年(第27回学術集会) Dr. Scott	装蹄	() セット	
	(7) 2015年	Dr. Mama & Steffey	麻酔	() セット
	(8) 2016年(第29回学術集会) Dr. Ducharme	呼吸器	() セット	
	(9) 2017年(第30回学術集会) Dr. Hyde	歯科	() セット	
お名前				
ご送付先住所				
ご所属				
電話番号				
メールアドレス				

連絡先： 日本ウマ科学会事務局

FAX：0285-44-5676

e-mail： e-office@equinst.go.jp

住所：〒329-0412 栃木県下野市柴1400-4 JRA競走馬総合研究所

協賛団体名

団体名	〒	住所
日本中央競馬会	106-8401	東京都港区六本木 6-11-1 六本木ヒルズゲートタワー
地方競馬全国協会	106-8639	東京都港区麻布台 2-2-1 麻布台ビル

賛助会員名簿

(五十音順)

会員名	〒	住所
(株)アイベック	170-0002	東京都豊島区巢鴨 1-24-12 アーバンポイント巢鴨 4F
公益財団法人 軽種馬育成調教センター	057-0171	北海道浦河郡浦河町西舎 528
公益財団法人 競走馬理化学研究所	320-0851	栃木県宇都宮市鶴田町 1731-2
JRA システムサービス(株)	135-0034	東京都江東区永代 1-14-5 永代ダイヤビル 7F
JRA ファシリティーズ(株)	104-0032	東京都中央区八丁堀 3-19-9 ジオ八丁堀
公益財団法人 ジャパン・スタッドブック・インターナショナル	105-0004	東京都港区新橋 4-5-4 日本中央競馬会新橋分館 6F
公益財団法人 全国競馬・畜産振興会	105-0004	東京都港区新橋 4-5-4 日本中央競馬会新橋分館 3F
公益社団法人 全国乗馬倶楽部振興協会	105-0004	東京都港区新橋 4-5-4 日本中央競馬会新橋分館 5F
中央競馬馬主相互会	105-0004	東京都港区新橋 4-7-26 東洋海事ビル 3F
DS ファーマアニマルヘルス(株)	541-0053	大阪府大阪市中央区本町二丁目 5-7 大阪丸紅ビル 10 階
一般社団法人 日本競走馬協会	106-0041	東京都港区麻布台 2-2-1 麻布台ビル
公益社団法人 日本軽種馬協会	105-0004	東京都港区新橋 4-5-4 日本中央競馬会新橋分館 3F
一般財団法人 日本生物科学研究所	198-0024	東京都青梅市新町 9-2221-1
公益社団法人 日本装削蹄協会	105-0004	東京都港区新橋 4-5-4 日本中央競馬会新橋分館 7F
一般財団法人 日本中央競馬会弘済会	106-8401	東京都港区六本木 6-11-1 六本木ヒルズゲートタワー 9F
公益社団法人 日本馬事協会	104-0033	東京都中央区新川 2-6-16 馬事畜産会館 7F
公益社団法人 日本馬術連盟	104-0033	東京都中央区新川 2-6-16 馬事畜産会館 6F
一般財団法人 馬事畜産会館	104-0033	東京都中央区新川 2-6-16
文永堂出版(株)	113-0033	東京都文京区本郷 2-27-18

編集後記

2020年は新型コロナで終始しました。2019年末に発生が確認されたウイルスは世界に伝搬して一向に衰えようとはしません。もっとも小生の手帖を見ると2月には同窓会とか飲み会とかが多く、このウイルスも短期収束するという脳天気な気分がただよっていました。しかしこのウイルスは手強い。経済活動も大きな打撃を受けています。今後もまだまだ続くコロナ禍、コロナの経済ダメージのもとでの長い生活を見通していく必要があります。

本号は4本の記事が掲載されています。

特別記事は馬をテーマに作られた2本のドキュメンタリー作品の監督お二人の対談を掲載しました。主題や手法は異なるものの、馬にこめた人との関係を深く掘り下げ表現したかったことを語り合っていました。

馬事往来では石井孝弘さんに「作業療法士から見たホースセラピー 馬との活動」を書いていただきました。ホースセラピーを使った作業療法の理念から具体的な行動まで広範に解説いただいています。

馬事往来のもう一つの記事として、小久保友香さんに「北の大地の草ばん馬」の報告をいただきました。ばんえい競馬のルーツである草ばん馬の競走が、北海道では連綿と続けられていることに驚かされました。小久保厳義さんの迫力ある写真とともにお読みください。

書籍紹介には本誌の編集委員でもある有吉正徳さんの『第5コーナー』を取り上げました。競馬であまり知られてはいないことや記録の深掘りなど、知識満載の書籍といえます。

(編集委員長 楠瀬 良)

入会申し込み方法

下記宛にお申し込み下さい。年会費は5,000円(国内)です。

日本ウマ科学会事務局

〒329-0412 栃木県下野市柴1400-4

JRA 競走馬総合研究所内

電話 0285-39-7398 FAX 0285-44-5676

E-mail : e-office@equinst.go.jp

Hippophile, No. 83, 2020

2020年12月発行

<http://jses.equinst.go.jp/>

編集委員長：楠瀬 良

発行者：青木 修

〒329-0412 栃木県下野市柴1400-4

JRA 競走馬総合研究所内

電話 0285-39-7398 FAX 0285-44-5676

郵便振替口座番号 00130-3-539393

または

ゆうちょ銀行(9900) 〇一九(ゼロイチキョウ)店

当座預金口座 539393

口座名：日本ウマ科学会(ニホンウマカガクカイ)

印刷者：株式会社 アイベック

〒170-0002 豊島区巣鴨1-24-12

電話 03-5978-4067